市原市片又木遺跡Ⅱ

（かたまたぎ）

2000

エヌ・ティ・ティ移動通信網株式会社
財団法人　市原市文化財センター

序　　文

房総半島の中央、東京湾を西に望む市原市は、先史時代より生活環境に恵まれた地域です。そのため、市内には先人たちの足跡が豊富に認められます。千葉県下でも有数の貝塚である西広貝塚・山倉貝塚・祇園原貝塚や、古代上総国の中心であったことをあらわす、国分寺・国分尼寺などに代表される遺跡によっても、太古よりの暮らしやすさが示されていると言えましょう。

千葉県は、首都圏のベッドタウンとして人口増加に見舞われ、宅地開発や道路網の整備が進展してまいりましたが、それに伴い発掘調査の数も大幅に増加しています。現在、当市においてもこのような開発行為と、それに伴う埋蔵文化財の調査が増加しています。今日ほど地域開発と埋蔵文化財保護との調和が強く求められる時はないと言えます。さらに教育関連分野におきましても、社会教育や地域の生涯教育の一助として埋蔵文化財調査の成果を取り入れるという活用の面で、埋蔵文化財保護の必要性とその責任はますます重要になりつつあります。

本書は片又木遺跡の調査成果を収録したものです。これらの資料が、研究者のみならず、博物館・図書館などの社会教育施設を通して、広く市民の方々の文化財保護思想育成に役立つとともに、教育資料としてご利用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、今回の調査にあたりご指導、ご協力を賜りました、エヌ・ティ・ティ移動通信網株式会社、周辺の住民のみなさま、文化庁、千葉県教育庁、市原市教育委員会をはじめ、お世話になりました多くの方々に対して心よりお礼申し上げます。

2000年３月

財団法人　市原市文化財センター
理事長　小　茶　文　夫

例　　言

1．本書は、千葉県市原市不入斗字北宮ノ台186番地先他に所在する片又木遺跡（第２次）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．発掘調査から報告書作成に至る業務は、エヌ・ティ・ティ移動通信網株式会社の委託を受け、千葉県教育委員会・市原市教育委員会の指導のもとに、財団法人市原市文化財センターが実施した。
3．発掘調査は以下のとおり実施した。

確認調査	担当　小橋健司	調査期間	1999年３月16日～1999年３月18日
		調査面積	679.32㎡のうち67.9㎡
本 調 査	担当　小橋健司	調査期間	1999年４月５日～1999年５月17日
		調査面積	630㎡

4．整理作業、本書の作成は小橋健司が担当した。なお、石器の実測は蜂屋孝之、自然遺物の同定は鶴岡英一から協力を得た。また、出土土器について大村直氏から、出土鉄滓について穴澤義功氏からご教示いただいた。記して感謝申し上げます。
5．本書に収録した出土遺物および調査記録は、すべて市原市埋蔵文化財調査センターで収蔵・保管している。
6．今回調査の管理コードは「セ288」である。

凡　　例

1．遺構実測図は1/40・1/60・1/80を基本とした。例外は各図中のスケールを参照願いたい。
2．遺構実測図中の、焼土・炭化物・柱痕はスクリーントーン、セクションポイント・遺物出土地点はドット、柱穴内の柱アタリは太線で示した。竪穴内の一点破線は床面の硬化部分を示している。
3．色調は新版標準土色帖に準拠して注記した。なお、10YRx/y の場合は x/y と表記し、「にぶい○○色」は「にぶ○○」というように略した。
4．遺構実測図中の方位は、国土座標の軸に基づくものである。図の上が北であるが、方位記号を付したものはその限りでない。竪穴建物の主軸方位は座標北を基準に、柱穴・炉跡・掘形の軸を勘案して、時計回りに何度振れるかを示している。
5．遺物実測図は1/4、拓影図は1/3を基本とした。なお、例外は注記した。
6．遺構・遺物の規模・寸法のうち、推定値については数字の後に「？」を付け示した。また、遺物観察表における「遺存」は、おおまかな数字で、あくまで目安である。
7．遺構番号は発掘調査時のものをそのまま読み替え、001号を１号というようにした。そのため、調査時の欠番もそのままにしてある。

本 文 目 次

序　文
例　言
本文目次
挿図目次
表目次
図版目次
第１章
　１．調査に至る経緯 …… 1
　２．遺跡の立地と歴史的環境 …… 1
　３．調査概要 …… 1
第２章
　１．縄文時代の遺構と遺物 …… 5
　２．弥生・古墳時代の遺構と遺物 …… 10
　３．古代の遺構と遺物 …… 21
　４．中世・近世の遺構と遺物 …… 24
　５．時期不明の遺構 …… 26
　６．遺構外出土遺物 …… 29
第３章
まとめ …… 29

挿 図 目 次

第１図　遺跡の周辺 …… 2
第２図　調査区全体図 …… 3
第３図　縄文時代遺構実測図 …… 6
第４図　縄文土器拓影 …… 8
第５図　５号・22号竪穴・出土遺物及び19号炉穴出土遺物実測図 …… 9
第６図　７号・40号竪穴・出土遺物実測図 …… 12
第７図　35号・38号・39号竪穴・出土遺物実測図 …… 13
第８図　１号・30号竪穴・出土遺物実測図 …… 15
第９図　10号・12号竪穴・出土遺物実測図 …… 17
第10図　33号・34号竪穴・出土遺物実測図 …… 18
第11図　４号・８号竪穴実測図・４号出土遺物実測図 …… 20
第12図　８号竪穴出土遺物実測図 …… 21
第13図　15号竪穴・出土遺物実測図 …… 22

第14図　6号・9号竪穴・出土遺物実測図 …… 23
第15図　11号方形周溝及び周辺遺構・出土遺物実測図 …… 25
第16図　11号・31号出土遺物実測図 …… 26
第17図　2号溝・出土遺物実測図 …… 27
第18図　31号内銭集中地点出土銭拓影図 …… 28

表　目　次

表1　遺構一覧 …… 4
表2　遺物観察表 …… 31
表3　16号貝ブロック組成 …… 37
表4　2号出土鉄滓 …… 37

図 版 目 次

図版1　昭和36年の地形
図版2　16号土坑・19号炉穴・5・7・40・35号竪穴
図版3　1・4・8・10・12・30・33・34号竪穴
図版4　調査区北東部・9・15号竪穴・2号溝・31号道
図版5　1・4・7・22・33・35号竪穴出土土器・土製品
図版6　8・9・10・34号竪穴出土土器
図版7　縄文土器・19号出土土器
図版8　1・4・5・7・30・39・40号竪穴出土土器
図版9　5・10・12・33号竪穴・11号方形周溝出土土器及び9号竪穴出土遺物
図版10　9号出土イノシシ歯・縄文石鏃・歴史時代土器・10号出土鉄鏃・土玉・土錘
図版11　石製品・出土鉄滓

第１章

１．調査に至る経緯

今回の調査は、第一種電気通信無線基地局の建設に伴い、エヌ・ティ・ティ移動通信網株式会社により1998年５月29日付けで「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会が提出されたことによる。これを受けて、市原市教育委員会ふるさと文化課が現地踏査・試掘を実施した結果、1998年６月４日付けで「縄文～平安時代遺物包蔵地１（不入斗遺跡群）」が所在する旨の回答がなされた。埋蔵文化財についての取り扱いを協議した結果、対象地域内に所在する遺跡については、緊急調査による記録保存の措置が採られることとなり、財団法人市原市文化財センターの受託事業として調査が実施されるに至った。

1999年３月16日から同18日まで、67.9㎡を対象とした確認調査を行い、遺構の分布と性格を把握した後、1999年４月５日から同５月17日の期間で、630㎡を対象に本調査を実施した。

２．遺跡の立地と歴史的環境

市原市は、房総半島の東京湾側のほぼ中央に位置し、南北に長くのびる市域を持つ。中ほどには養老川が背骨のように流れている。当遺跡が位置するのは、市内北西部にあたる、片又木川と立野川に北と南を挟まれる台地上、南北の開析谷の先端が近づく狭い平坦地である。標高は58ｍほどで、谷底とは比高が23～24ｍある。大局的に見れば、養老川の下流左岸、袖ケ浦市・木更津市を流れる小櫃川の下流右岸にあたる。埋め立て前の海岸線までは、直線にして約３㎞の距離である。

当遺跡の東南東約500ｍ先には1983年に１次調査の行われたＡ・Ｂ・Ｃ地点がある。この調査では、縄文時代早期の炉穴・土坑多数と、古墳時代前期と奈良・平安時代の竪穴建物、平安時代の方形周溝などが検出された（寺島1984）。今回の調査区に近いＡ・Ｂ地点では古墳時代前期の竪穴建物・古代の方形周溝が見られたことから、１次と２次の調査区の遺構はこの二つの時期に同じ集落を構成していたのであろう。

なお、１次調査の報告では、Ｃ区の竪穴建物内での鉄滓の検出などから、奈良・平安時代の鍛冶集団の集落と該期の遺構を性格付けしていたが、今回は中世の溝などに鉄滓が混入したかたちで認められたものの、Ｃ区とは１㎞近く離れていることもあり、それを明確にするには至らなかった。ただ、15号竪穴から鉄滓が出土したことを積極的に評価するなら、その可能性は否定できない。

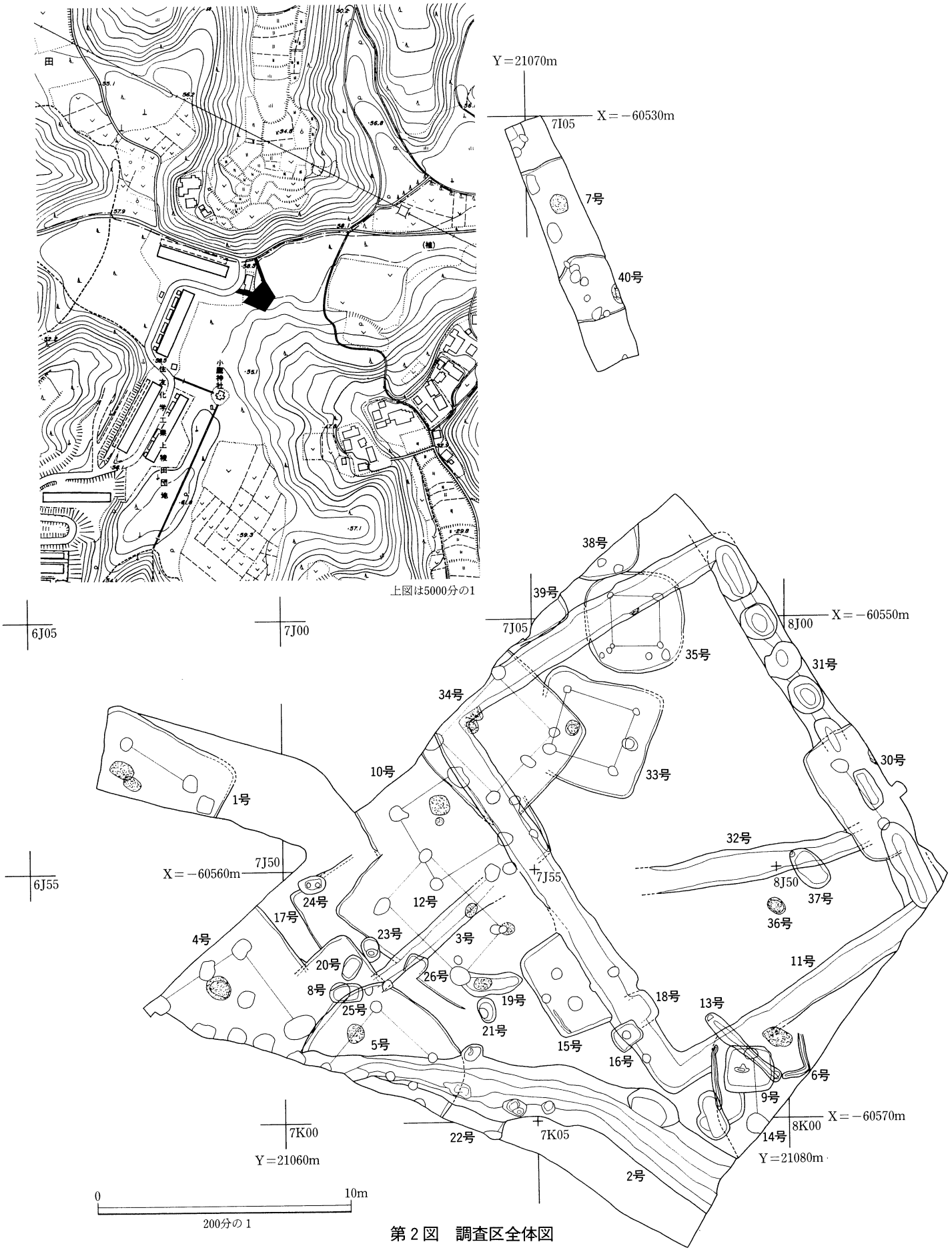
３．調査概要

調査区は進入前、山林の一部であった。地形は、南東に向かってゆるやかに下っており、東端に接する道路を越えてすぐのところから谷の急傾斜がはじまる。

現表土から遺構検出面までは50～80㎝前後の深さである。ほとんどの遺構は、にぶい黄褐色のソフトロームに黒褐色の覆土が見え、おおむね確認しやすい状態であった。撹乱は人為的なものと根によるものがいくつか認められたものの、全体に影響を及ぼすほどではなかった。ただ、狭い平坦地なので開析・削平を受けやすかったらしく、遺構は遺存が良くなく、大体が浅かった。

表土と遺物包含層上層は重機により掘削した。調査は排土場所の確保のため、主要部を南西・北東

第１図　遺跡の周辺（六万坪）


上図は5000分の1
Y＝21070m
X＝－60530m
7I05
7号
40号
38号
39号
7J05
8J00
X＝－60550m
35号
31号
34号
33号
30号
10号
1号
6J05
7J00
32号
7J50
X＝－60560m
6J55
7J55
8J50
37号
24号
12号
36号
17号
23号
3号
4号
20号
26号
11号
8号
19号
18号
13号
25号
21号
5号
15号
16号
6号
9号
X＝－60570m
7K00
22号
7K05
8K00
14号
Y＝21060m
Y＝21080m
2号
0
10m
200分の1

第２図　調査区全体図

に分け、半分ずつ行わざるを得なかった。また、北部の飛び地状の部分は、重機の進入が不可能だったため人力で掘り下げて調査した。

なお、調査区には、国土座標に基づいて、20m四方ごとの大グリッドとその中を百等分した2m四方ごとの小グリッドを設定した（記号は第2図参照。以下の図中のグリッド名はこれによる。）。

検出された遺構は、縄文時代早期炉穴2基・縄文土坑7基、弥生時代後期後半竪穴建物4棟・弥生終末期7棟・古墳時代前期竪穴建物6棟、奈良・平安時代方形周溝1基・竪穴建物1棟、平安時代後半小竪穴1基、中世溝1条、中近世溝2条、近世道路状遺構1条・時期不明土坑3基である。

調査区内からは円礫・破砕礫が多く出土している。地山ローム層と遺構覆土に混ざって出土したため、確実に時期が分かるものがなく、すべて帰属不明の遺物として取り上げた。合計で約19kgあり、焼けて割れたように見受けられるものが多かった。また、割れていなくても赤みがかったものも少なくなかった。これらは自然物ではなく、調理具として用いられた可能性が高いだろう。後述のように、縄文早期土器が散在することから考えると、該期の所産なのかもしれない。

表1　遺　構　一　覧

遺構番号	時　代	種　類	主な出土遺物	遺構番号	時　代	種　類	主な出土遺物
14号	縄文早期	炉穴	土器	30号	弥生終末	竪穴建物	土器
19号	縄文早期	炉穴	土器	39号	弥生終末	竪穴建物	土器
13号	縄文？	陥し穴？		4号	古墳前期	竪穴建物	土器・土錘
36号	縄文	焼土		8号	古墳前期	竪穴建物	土器
16号	縄文	土坑	貝ブロック・黒曜石破片	12号	古墳前期	竪穴建物	土器
18号	縄文	土坑		17号	古墳前期？	竪穴建物	
20号	縄文	土坑		33号	古墳前期	竪穴建物	土器
24号	縄文	土坑		34号	古墳前期	竪穴建物	土器
25号	縄文	土坑		11号	古代	方形周溝	土器・土玉
37号	縄文	土坑		15号	古代	竪穴建物	支脚・土器・須恵器
6号	弥生後期？	竪穴建物？		9号	平安	竪穴	ロクロ土師器・イノシシ歯
7号	弥生後期	竪穴建物	土器・石	2号	中世	溝	土器・陶器・鉄滓
22号	弥生後期	竪穴建物	土器	3号	中近世	溝	
40号	弥生後期	竪穴建物	土器	32号	中近世	溝	陶器
5号	弥生終末	竪穴建物	土器・軽石	31号	近世	道路	陶磁器・砥石・寛永通寶・宝永テフラ
35号	弥生終末	竪穴建物	土器・小型棒状土製品	21号	時期不明	土坑	
38号	弥生終末	竪穴建物		23号	時期不明	土坑	
1号	弥生終末	竪穴建物	土器・粘土板	26号	時期不明	土坑	
10号	弥生終末	竪穴建物	土器・鉄鏃				

第２章

１．縄文時代の遺構と遺物

概要　炉穴が２基、土坑が７基検出された。遺構からの遺物は炉穴を除き、ほとんど得られなかった。

13号（第３図右下）

規模：長軸3.84ｍ　短軸0.3～0.62ｍ　深さ0.38～0.63ｍ　底標高：57.0ｍ

形状は陥し穴に近いが、検出面から底面まではそれほど深くない。９号・６号を調査した際に検出されたもので、覆土はソフトロームとほとんど変わりがない。底面はハードロームまで達していた。出土遺物はない。

14号炉穴（第３図右下）

規模：長軸1.96ｍ　短軸1.12ｍ　深さ0.25～0.35ｍ　底標高：57.3ｍ

調査区東端近くで検出された。明確な焼土のブロックは見あたらないものの、覆土に焼土粒が含まれることから、炉穴と考えられる。また、覆土の上方に小さい土器片の集中する部分があった。40片ほどあり、うち１片のみが内外面とも条痕、２片が外面条痕調整であった。他は擦痕である。

19号炉穴（第３図左上　第５図）

規模：長軸2.4ｍ？　短軸0.76～0.92ｍ　深さ0.15～0.28ｍ　底標高：57.7ｍ

12号竪穴内で検出された。残存する覆土に焼土がかたまって認められたことから、炉穴と考えられる。検出面では、縄文早期の深鉢が大きな破片で出土した。口縁端が角頭状で、内外面とも擦痕で調整されている。田戸上層式末葉から子母口式にかけてのものと思われる。

36号（第３図左中）

規模：長軸0.78ｍ　短軸0.56ｍ　焼土の深さ0.15～0.2ｍ　底標高：57.7ｍ

調査区北東部で検出された。ソフトローム上面が火を受けた跡である。念のため焼土を掘削してみたが、掘形は確認できなかった。炉穴の残存部分であろうか。遺物は出土しなかった。

37号土坑（第３図左中）

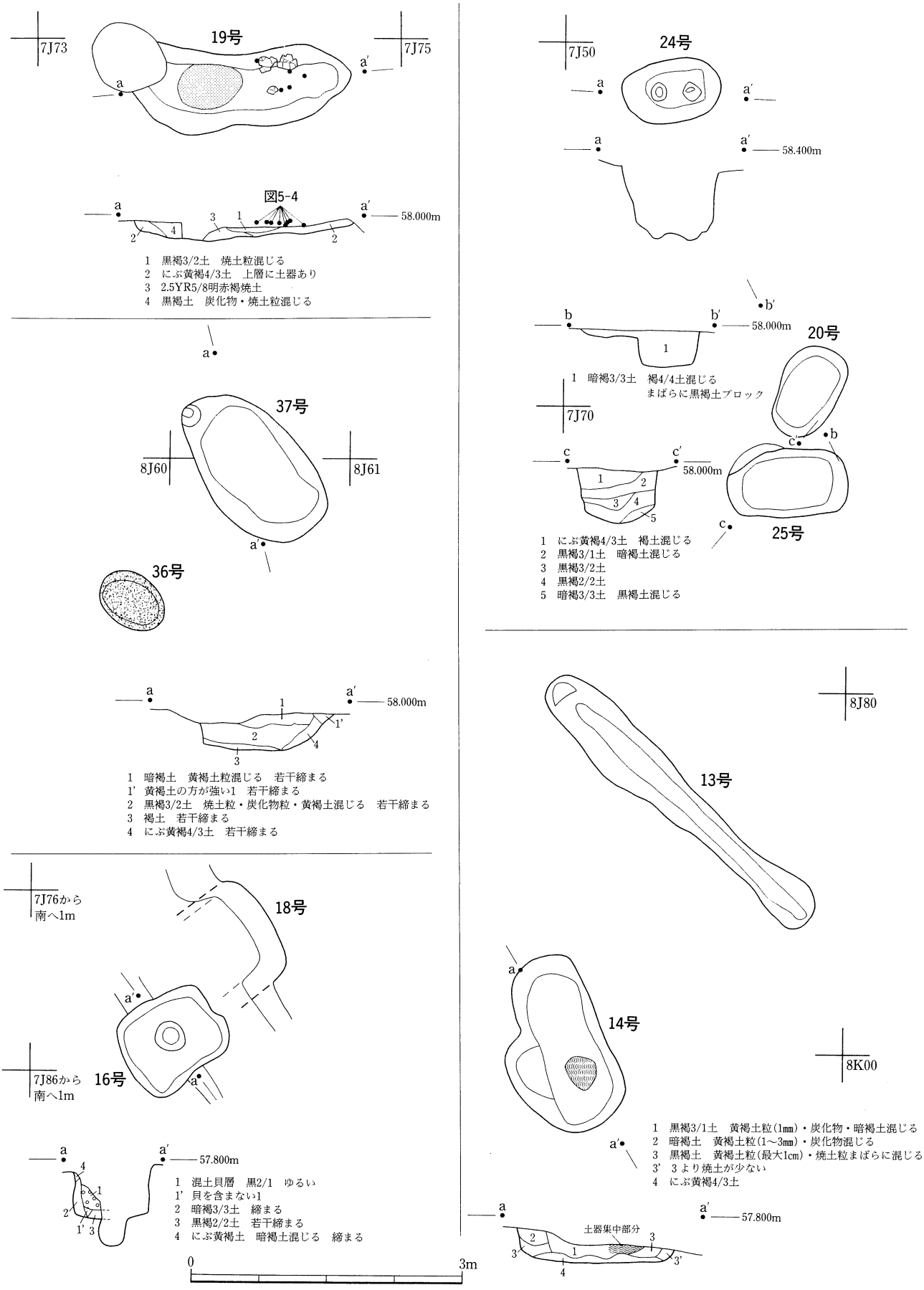
規模：長軸1.92ｍ　短軸1.12ｍ　深さ0.23～0.41ｍ　底標高：57.5ｍ

調査区北東部で検出された。遺物は出土しなかったが、覆土の色調などから縄文時代の遺構と判断した。焼土・炭化物粒が土層に確認されたが、性格は不明である。

20号土坑（第３図右上）

規模：長軸1.04ｍ　短軸0.68ｍ　深さ0.35ｍ　底標高：57.55ｍ

８号竪穴を調査中に検出された。遺物は出土しなかったが、覆土の様子から縄文時代と判断した。



第3図 縄文時代遺構実測図

24号土坑（第３図右上）

規模：長軸1.1ｍ　短軸0.68ｍ　深さ0.63～0.73ｍ（底面）　底標高：57.3ｍ

17号竪穴を調査中に検出された。覆土は7.5YR3/4暗褐土である。底面に2つピットがあり、陥し穴とも考えられる。ただ、深さがない点と、似た形状の20・25号土坑が近辺にあること、そして、同じく底面ピットを持つ16号土坑の覆土中に貝ブロックが見られたことを考え合わせると、断定はできない。遺物は時期不明の縄文土器小片が出土しただけである。

25号土坑（第３図右上）

規模：長軸1.32ｍ　短軸0.76ｍ　深さ0.49ｍ　底標高：57.35ｍ

８号竪穴の北東柱穴に切られる。形状が20・24号と似ており、同じ性格のものなのかもしれない。なお、断面図中の土層は８号柱穴ケのものである。

16号土坑（第３図左下　表２）

規模：長軸1.2ｍ　短軸1.0ｍ　深さ0.23～0.69ｍ（底面まで）　底標高：56.85ｍ（土坑）

11号方形周溝を調査中に検出された。底面近くの残存覆土の一部が11号覆土掘削時に除去されたが、11号壁面側はかろうじて残っていた。底面にはピット（直径0.33ｍ　深さ0.31ｍ）がある。覆土中位には、イボキサゴ主体の貝ブロックが認められた。貝ブロックの内容は表２で示している。遺物は少量の時期不明の縄文土器片と黒曜石の破片が出土した。覆土が他の縄文時代遺構に比べ、黒かったのは、覆土中に有機物が多かったためであろうか。

18号土坑（第３図左下）

規模：辺1.24ｍ　深さ0.45ｍ？　底標高：57.52ｍ

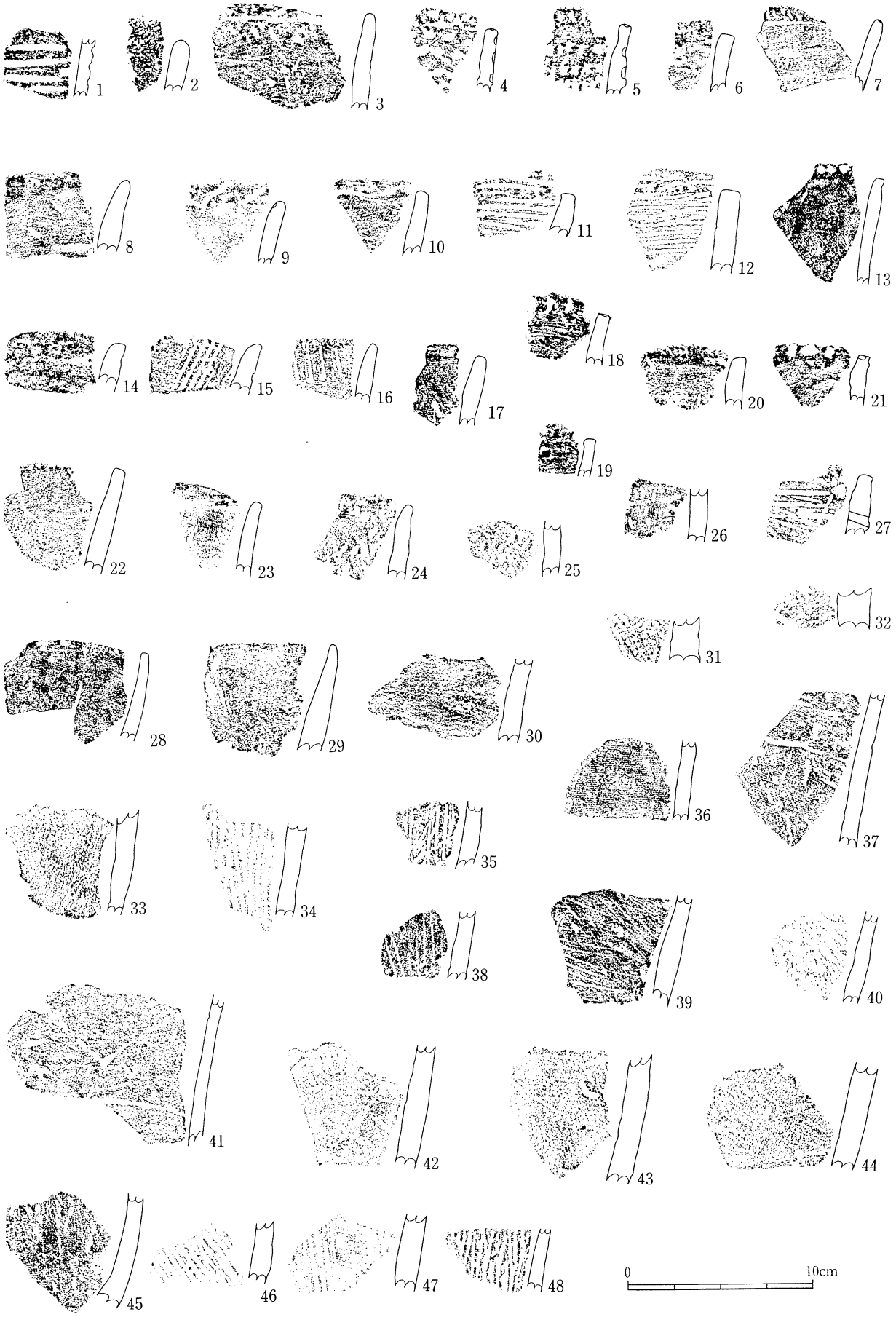
16号と同じく11号に切られる。こちらの覆土は地山のソフトロームが少し黒ずんだ程度であった。長さが16号に近いので、元は同様の形状・性格のものであったかもしれない。遺物はない。

縄文土器（第４図１～48）

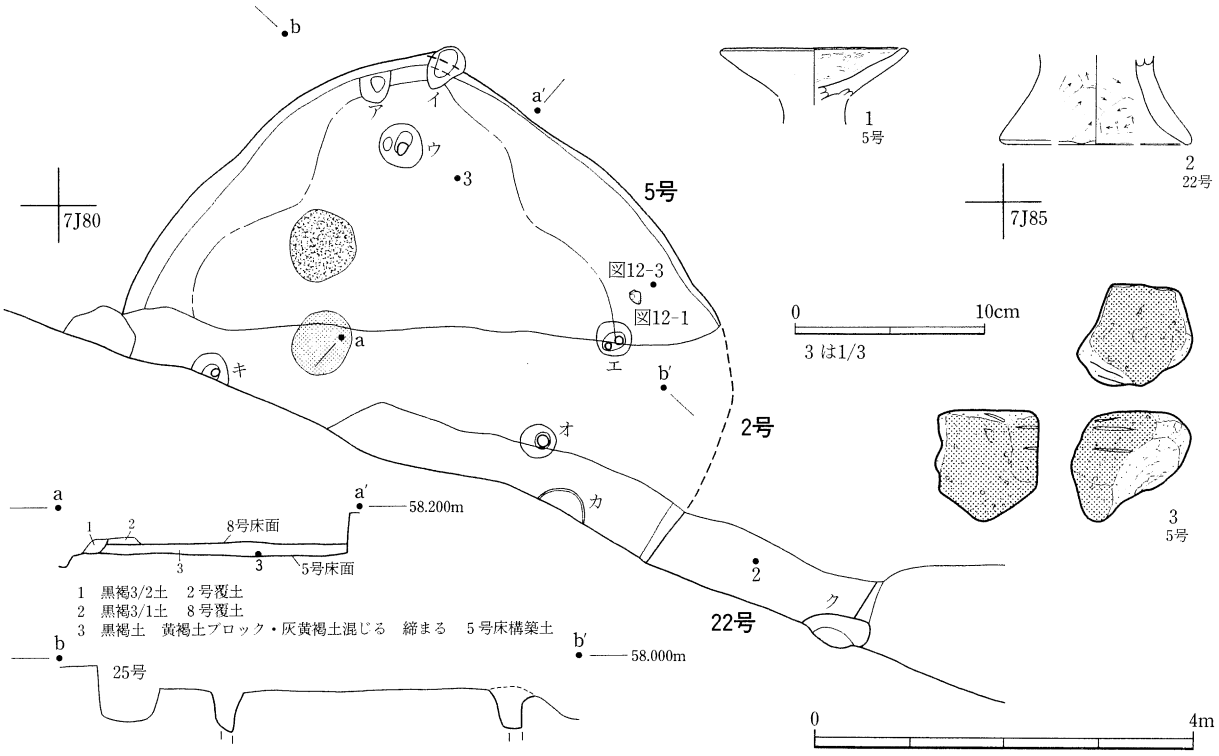
調査区内では、田戸上層式から子母口式を中心とする、縄文時代早期の土器片が調査区北西半を中心に出土した。ただし、14・19号炉穴を除き明確な遺構に伴うものはなかった。他時期の遺構に混在するものが多く、散漫な分布であり、特に集中する土層も確認できなかったので、縄文早期の包含層として検出するには至らなかった。なお、小片が多く、全体で整理箱２箱分強出土した。出土状況が礫・破砕礫と似ているので、両者が関連する可能性も考えられる。

また、参考までに記すと、１次調査ではＡ区で早期竪穴１基・炉穴６基・土坑１基、Ｂ区で炉穴４基、Ｃ区で炉穴17基・土坑４基が検出されている。土器も早期後半のものが98％を占め、全体で整理箱５箱分ほど出土したという（寺島1984）。

図中の土器はおおむね縄文時代早期後半、田戸上層式から子母口式にかけてのものである。代表的と思われるものを抜き出し、図示した。なお、太沈線文の１は田戸下層式、胎土に雲母が目立つ48は諸磯Ｃ式のようである。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
20
21
19
22
23
24
25
26
27
32
31
28
29
30
36
37
33
34
35
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
0
10cm

第４図　縄文土器拓影



第5図　5号・22号竪穴・出土遺物及び19号炉穴出土遺物実測図

2～24・27～29が口縁部、他は胴部である。器面は主に擦痕状の調整がされる。以下、特に述べないものは擦痕調整である。なお、出土したほとんどの破片で胎土に繊維の混入が認められた。

口縁部片には、装飾的でないもの（8・10・13・14・19・22・23・28・29)、外面に米粒状の刺突文を持つもの（24)、端部に絡条体圧痕文を持つもの（6・20)、絡条体圧痕文が端部から外面に続くもの（2・3)、端部に刺突文を持つもの（9・13・17・18・21)、端部に刺突文があり、外面にも刺突文列が巡るもの（4・5)、端部に刺突文があり、体部に画像的な刺突文があるもの（7)、外面に縦の刺突押引文を持つもの（16)、端部と外面に横の条痕文を持つもの（11・12)、縦の条痕文を持つもの（15)、横の条痕文と円孔文を持つもの（27）がある。

胴部片には、24と同一個体と思われる刺突文を持つもの（25・26)、貝殻背圧痕文を持つもの（31・32)、内外面擦痕調整のもの（30・33・37・41～45)、内外面条痕のもの（34・35・40・46・47)、外面が条痕、内面が擦痕のもの（38・39)、外面が擦痕で、内面が条痕のもの（36）がある。

2．弥生・古墳時代の遺構と遺物

概要　今回の調査では、弥生時代後期後半（以下、弥生後期後半）から古墳時代前期（以下、古墳前期）の竪穴建物が、いくつか切り合いながら検出された。前回調査では検出されていない時期の竪穴が今回の位置で確認されたことは、近隣における該期の動態を追求する上で重要である。なお、以下の記述順は掲載図の便利もあり、必ずしも遺構の新古に対応していない。

5号竪穴（第5図上）

規模：長軸6.2m　短軸5.4m　深さ北壁0.4m　西壁0.15m　床標高：57.7m　主軸方位：319°

各辺が外にふくらむ長方形である。床面は壁際を除いて硬化していた。炉はウとキを結ぶ線上に位置する。2号溝に切られるトーン部分は、床面掘削後に確認された焼土の範囲で、前代の炉の可能性がある。ウ・エ・キが柱穴であろう。ウ・エはそれぞれ床面から、40cm、37cmの深さがある。ウは平面で柱アタリを観察すると、長方形に見受けられたので、柱材は板状のものだったかもしれない。オは位置を見るとハシゴ穴にふさわしく思えるものの、その掘形は垂直に近く、深さも58cmと他の穴と釣り合わない。これは22号の柱穴である可能性が考えられる。

本遺構は古墳前期の8号竪穴に切られており、覆土の遺存が悪かった。そのため遺物もわずかで、図示しうる土器は1しかない。唯一、砥石と思われる軽石3が床面直上から得られた。

床面精査時に柱穴・炉とも覆土が黄褐色で締まっており、確認が困難であったことからすると、建物の解体・廃絶作業が丁寧に行われたのかもしれない。

遺物が少なく確定はできないが、形状からすると、弥生終末期のものであろう。

22号竪穴（第5図上）

規模：深さ0.12m　床標高：57.8m

形状は不明。上述の通り、オが柱穴の可能性がある。2号中世溝・5号竪穴と切り合う。床面レベルが低い5号の覆土に、22号の硬化した床面が見あたらなかったので、本遺構が先行すると考えられる。弥生後期後半のものであろう。遺物は、炉器台もしくは台付土器の脚部2が床面直上に出土した

だけである。

7号竪穴（第6図左）

規模：長軸6.6m　深さ北壁0.2m　南壁0.1m　床標高：57.95m　主軸方位：340°?

調査区北部の飛び地状部分で検出された。アからオは31号近世道の掘り込みである。これらのうち、竪穴内のものの下層にたまたま柱穴がある可能性も考え精査したが、検出できなかった。そのため柱穴は調査区外に想定できる。床面は40号部分が若干ゆるい程度で、まんべんなく硬化していた。遺物は大体、炉の近辺で得られた。炉は8㎝の深さで、焼土がそれほど明瞭ではなかった。壺の口縁5は口縁を下にして、甕3は炉の脇でまとまって検出された。壺は転用器台であろう。

南側が40号竪穴と切り合うが、40号の覆土に7号の床面が検出できたため、本遺構が後から作られたと考えられる。出土遺物から、弥生後期後半の所産と思われる。

40号竪穴（第6図右）

規模：長軸5.0m?　短軸4.2m?　深さ0.1m　床標高：57.75m　主軸方位：8°?

7号竪穴に切られる。炉と竪穴の一角の位置関係から、ケを柱穴、スをハシゴ穴と考えた。炉は12㎝の深さである。主軸方位は6・35・38・39号に近い。これらは時期的に近接するのかもしれない。

遺物は少なかったが、切り合いからすると弥生後期後半であろう。

35号竪穴（第7図）

規模：南北軸4.0m　東西軸4.0m?　深さ北西壁0.29m　東壁0.3m　南壁0.27m　床標高：57.95m
主軸方位：0°

調査区北西で検出された。ウ・オ・ケ・シが柱穴、キがハシゴ穴と思われる。それぞれの床面からの深さは、順に、28・12・11・29・19㎝である。柱穴は覆土が床面とほとんど変わらず、検出が困難であった。11号方形周溝に北西部分を破壊されるものの、遺物は豊富に出土した。覆土下層には柱穴上にも焼土が広がり、廃絶時の建物解体作業を示唆している。炉の遺存部は4㎝の深さである。炉の覆土には焼土は少なく、竪穴覆土に近かった。床面の硬化は柱の間を中心に認められた。

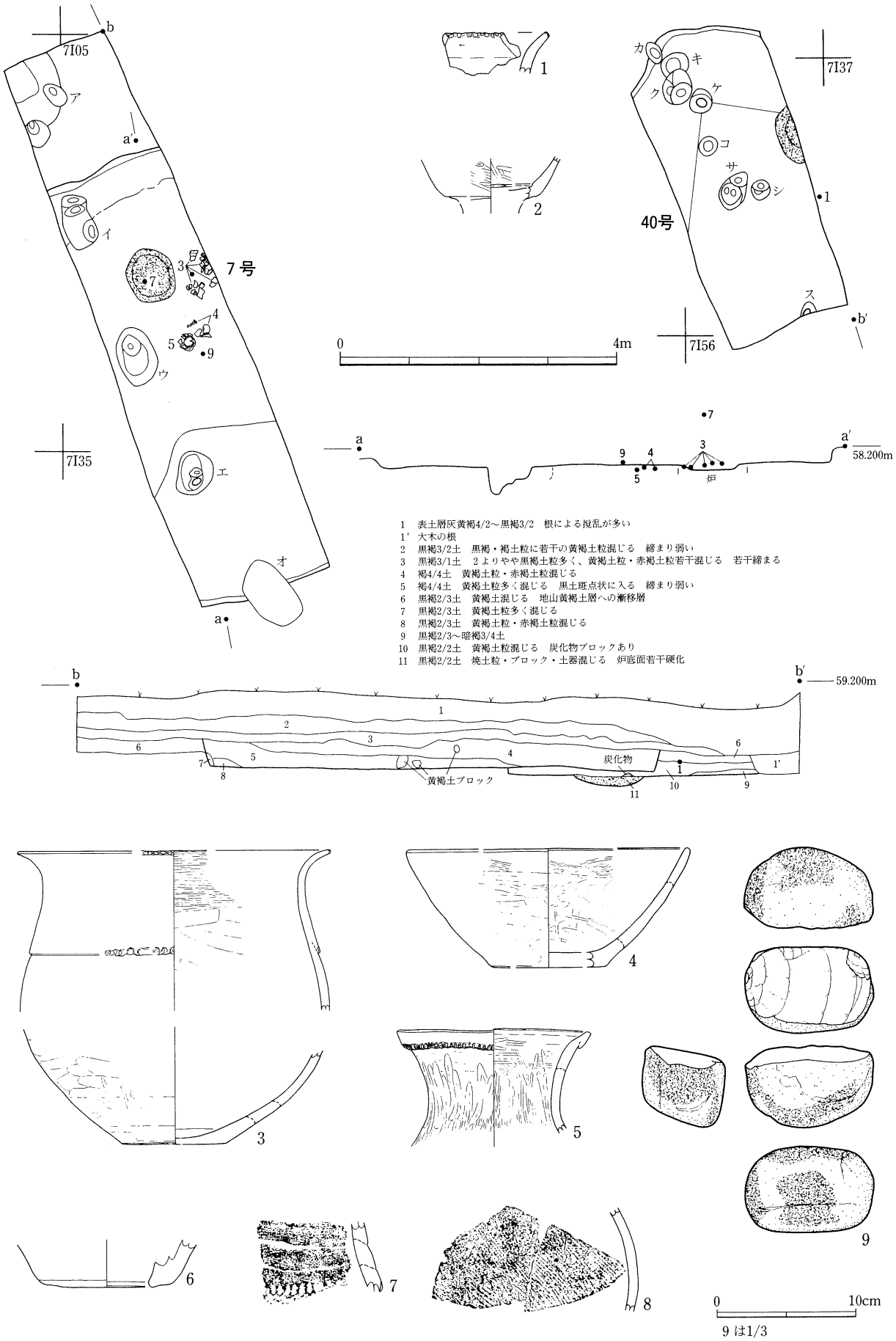
遺物は北西隅とハシゴ穴付近に集中して出土した。ハシゴ穴付近の集まりは床面直上で検出されたが、北西の方は覆土上位から竪穴中心に向かって傾斜するかたちで確認された。これらの遺物を同時期と想定すれば、この出土状態は、土器が置かれた時点では、竪穴が北側を中心に埋まりかけていた状況を示すのであろう。

なお、結節文で装飾された鋸歯状文様を持つ壺、無文の鉢、くびれの屈曲が強い甕の存在から、本遺構は弥生終末期に属すると思われる。

38号竪穴（第7図）

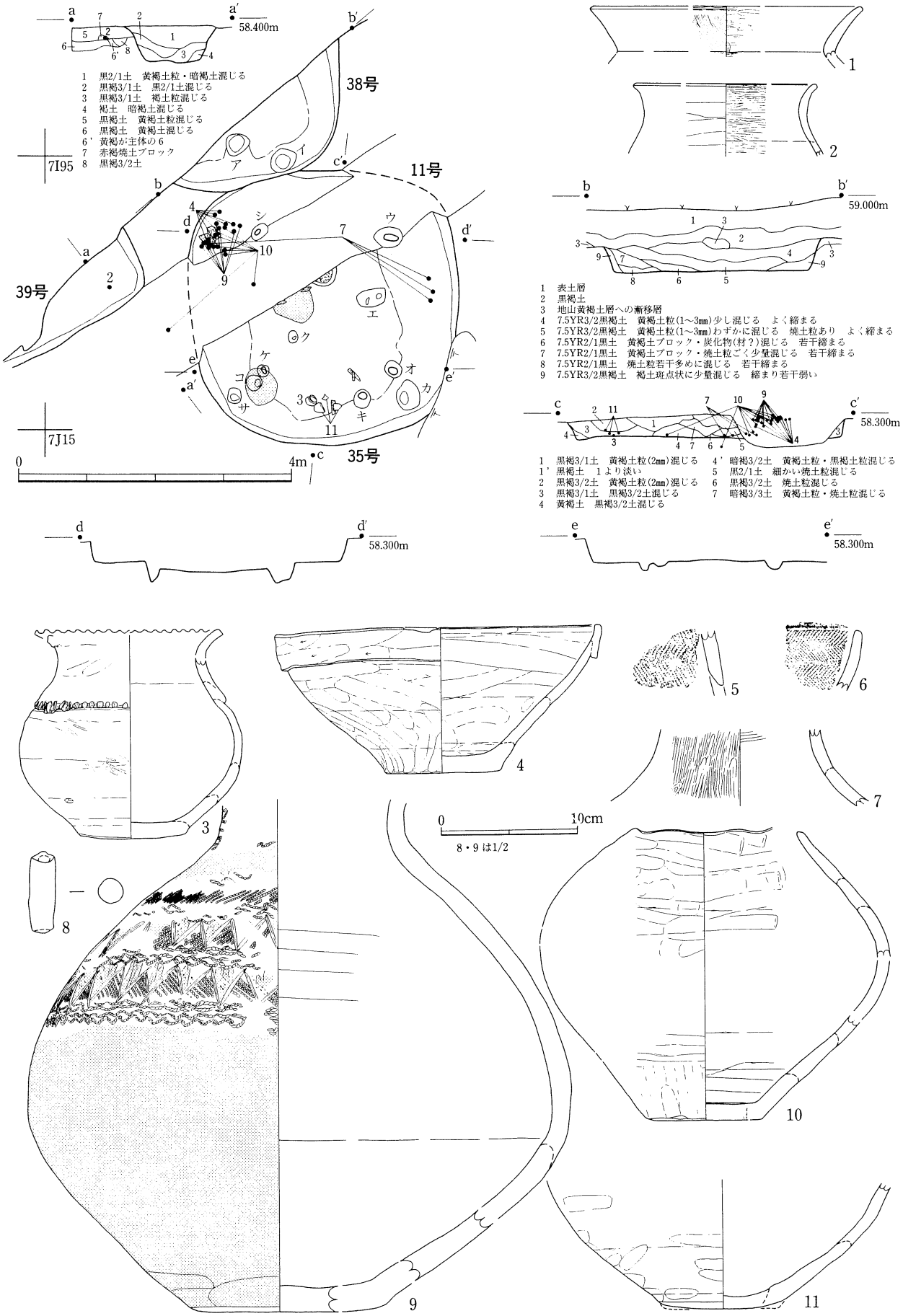
規模：東西軸3.0m?　深さ東壁0.31m　南壁0.35m　床標高：57.9m　主軸方位：0°?

35号竪穴に南側を接するかたちで検出された。アをハシゴ穴と考えた。床面は壁際を残して硬化している。遺物はまったく出土しておらず、時期の判断が難しい。しかし、丸まった角と辺や、検出さ



1　表土層灰黄褐4/2～黒褐3/2　根による撹乱が多い
1'　大木の根
2　黒褐3/2土　黒褐・褐土粒に若干の黄褐土粒混じる　締まり弱い
3　黒褐3/1土　2よりやや黒褐土粒多く、黄褐土粒・赤褐土粒若干混じる　若干締まる
4　褐4/4土　黄褐土粒・赤褐土粒混じる
5　褐4/4土　黄褐土粒多く混じる　黒土斑点状に入る　締まり弱い
6　黒褐2/3土　黄褐土混じる　地山黄褐土層への漸移層
7　黒褐2/3土　黄褐土粒多く混じる
8　黒褐2/3土　黄褐土粒・赤褐土粒混じる
9　黒褐2/3～暗褐3/4土
10　黒褐2/2土　黄褐土粒混じる　炭化物ブロックあり
11　黒褐2/2土　焼土粒・ブロック・土器混じる　炉底面若干硬化

第6図　7号・40号竪穴・出土遺物実測図



第7図 35号・38号・39号竪穴・出土遺物実測図

れた位置からすれば、35・40号に近接する弥生後期後半から終末期のものと思われる。

39号竪穴（第７図）

規模：深さ東壁0.19m　床標高：57.95m　主軸方位：331°？

東隅の一角のみ検出された。柱穴は見あたらず、規模の想定ができない。角が直角に近いことと、出土遺物の様相からすれば、35号などより若干新しい時期と思われる。

１号竪穴（第８図上）

規模：東西軸5.76m　深さ北壁0.32m　床標高：57.95m　主軸方位：302°

調査区の北西に位置する。ア・イが柱穴、ウが「貯蔵穴」である。それぞれの床面からの深さは、36・39・35cmである。イとウは床面の土とほとんど変わらず、部分的に床面土層を掘り下げてはじめて確認できた。イの覆土は地山の黄褐色ローム土に近く、ウは地山が若干黒ずんだような色であった。竪穴覆土には焼土と炭化物が少なからず含まれており、床面上にはブロックとして認められた。炉は、床面のレベルにおいては北西側のトーン部分が焼土を多く含み、炉本体のように見受けられたが、覆土を掘削すると炉床は南側の方に認められた。炉の北西部からは、盆状に形作られた粘土板が被熱したものが出土した。これは土器の胎土と比較して非常に粗く、焼成も甘かった。炉に関係するものであろう。覆土中から、内弯口縁を持つ壺４、床面直上から、杯部底面がくぼむ高杯３が出土した。これらと竪穴の形状からすると、本遺構は弥生終末期に属すると思われる。

30号竪穴（第８図下）

規模：長軸5.4m　短軸5.4m？　深さ北壁0.32m　西壁0.34m　南壁0.17m　床標高：57.55m
主軸方位：325°

11・31号に切られるため遺存状態は良くない。エ・オが柱穴である。それぞれの床面からの深さは62・63cmである。柱穴・炉は、覆土の色調がはっきりしており、検出が容易であった。炉は10cmの深さである。床面は、硬化面とそうでない部分が明確に分けられず、全体が若干締まっている程度であった。土層中には焼土・炭化物がほとんど見られなかった。31号からの掘り込みにより床面以下まで撹乱されているものの、覆土中から遺物が得られた。

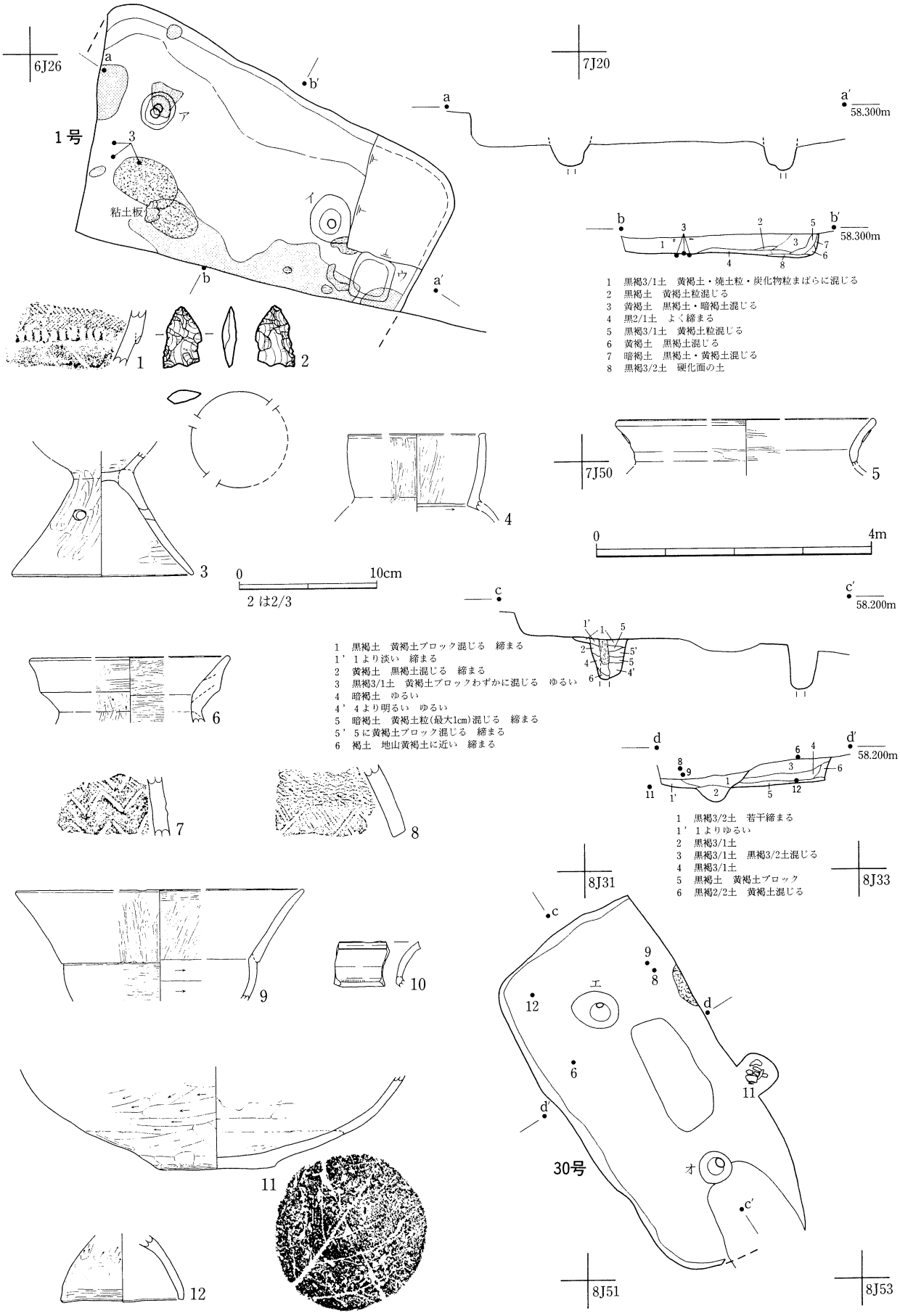
一見、小型丸底鉢風の土器９は、台付鉢のような器形かもしれない。覆土一括取り上げ資料だが、口縁端部を強く面取りされる甕10などが出土していることから、本遺構は弥生終末期に属するものと考えられる。

10号竪穴（第９図）

規模：北東・南西軸6.1m　深さ西壁0.22m　床標高：57.9m　主軸方位：301°

調査区北側で検出された。ア・イ・オ・カが柱穴、エがハシゴ穴、ウが「貯蔵穴」であろう。床面からの深さはそれぞれ順に、35・63・40・40、55、43cmであった。炉には脇に別の被熱箇所があった。それぞれ、12cm・６cmの深さである。

北東端を34号竪穴と切り合うが、焼土混じりの締まらない34号の覆土が入ることから、本遺構が34



第8図 1号・30号竪穴・出土遺物実測図

号より古いようである。また、竪穴床面の外周が、0.8～1ｍの幅（深さ15㎝程度）で黒ずんでいたが、これは、床面の構築時に、粗掘りがその範囲で行われたことを示すと考えられる。

遺物は炉の近辺で、床面に近い高さから多く得られた。また、焼成前の粘土ブロックが床面で検出された。加えて定角式様の鉄鏃が覆土中から出土している。

遺存の良い個体は少なく、確定しがたいが、いわゆる炉器台の形状に古い様相が認められる点などから、本遺構は弥生終末期に属すると思われる。

12号竪穴（第９図）

規模：長軸5.68ｍ　短軸7.12ｍ　深さ北西壁0.12ｍ　南西壁0.15ｍ　床標高：57.9ｍ

主軸方位：313°

10号と切り合って検出された。形状は柱の配置からすると長方形であろう。南東に向けて立ち上がりが低くなっていく。覆土下位には焼土・炭化物が多かった。10号覆土の中に焼土・炭化物を含む12号の覆土が明瞭に認められたので、12号の方が後出するようである。なお、建材と思われる炭化物が放射状に近いかたちで検出されたので、本遺構は廃絶時に火を受けたものと思われる。

キ・ク・ケ・コが廃絶時の柱穴、サ・シが立て替え以前の柱穴の一部だと考えられる。炉はキ・クの間で検出された。これは３号溝に切られており、深さ５㎝程しか遺存しない。クは炉のような焼けた面を切って掘られているが、これはサ・シが柱穴であった時点以前の遺構のものかもしれない。床面からの深さは順に、35・35・40・44、32・33cmである。なお、サ・シと対応する柱穴は認められなかった。

遺物は炉の近くで、杯部底がくぼむタイプの高杯脚部１が得られた程度であった。切り合い関係からすると、本遺構は古墳前期に属するものと思われる。

33号竪穴（第10図）

規模：東西軸4.8ｍ　南北軸4.5ｍ　深さ北壁0.2ｍ　東壁0.24ｍ　南壁0.23ｍ　床標高：57.95ｍ

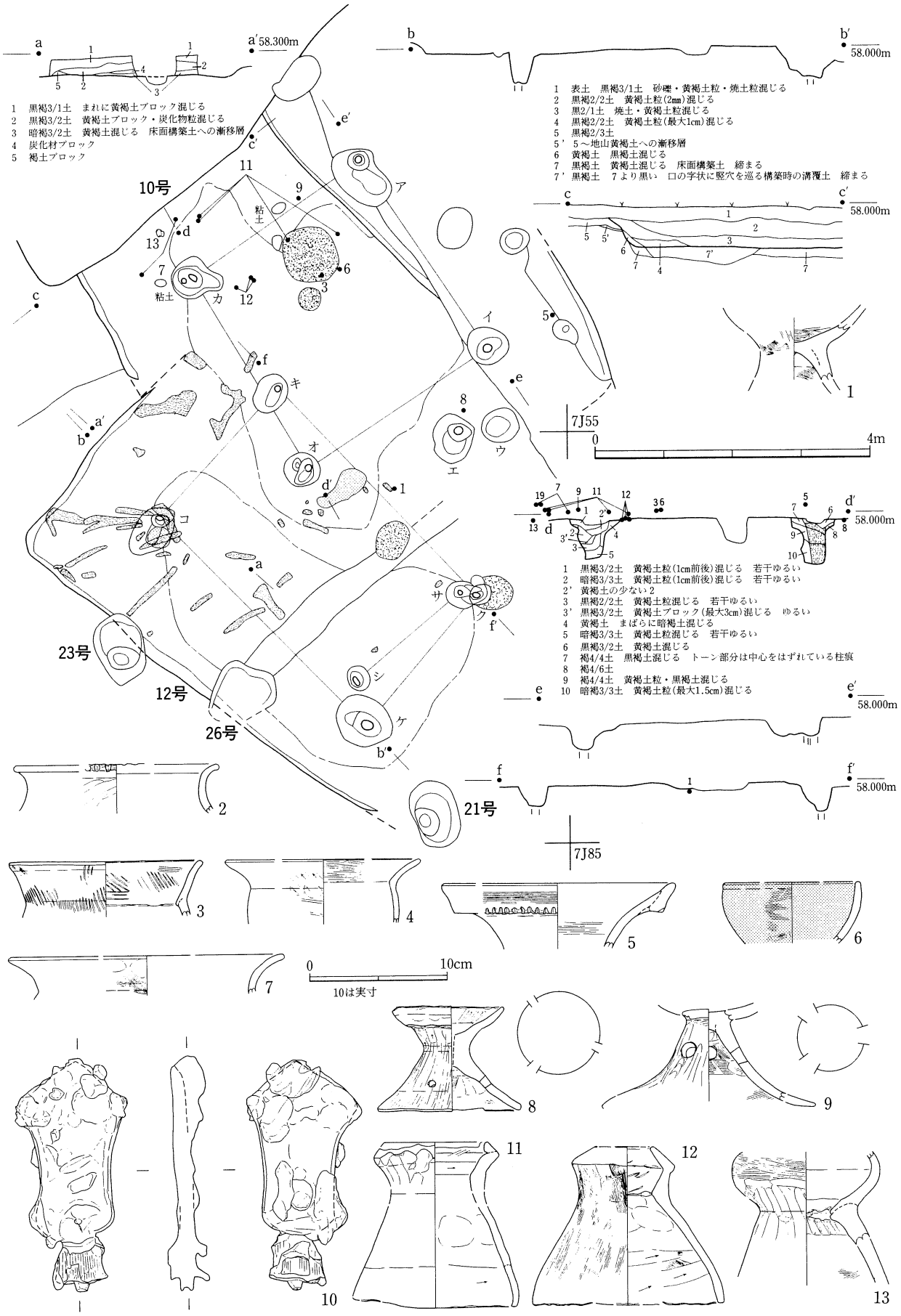
主軸方位：288°

34号竪穴に北西部分を切られる。ほとんど正方形である。ア・イ・エ・カが柱穴、ウがハシゴ穴であろう。深さはそれぞれ床面から、78・82・88・88、49㎝である。これらは床面と覆土がほとんど変わらず、床構築土を掘り下げるまで確認することができなかった。これは廃絶時の解体作業によるものと思われる。エの直上に壺体部９が出土したこともそれを示唆する。ただし、柱穴の径の小さい点が不自然ではある。炉は34号竪穴内に位置したため、焼土がほとんど遺存していないものの、掘形が確認できた。床面は壁際を除き、全体的に硬化していた。なお、10号に見られた竪穴構築時の荒掘り溝が、幅70㎝前後、深さ15㎝前後で本遺構にも確認できた。竪穴の形状と出土土器の様相から、古墳時代前期に属すると思われる。

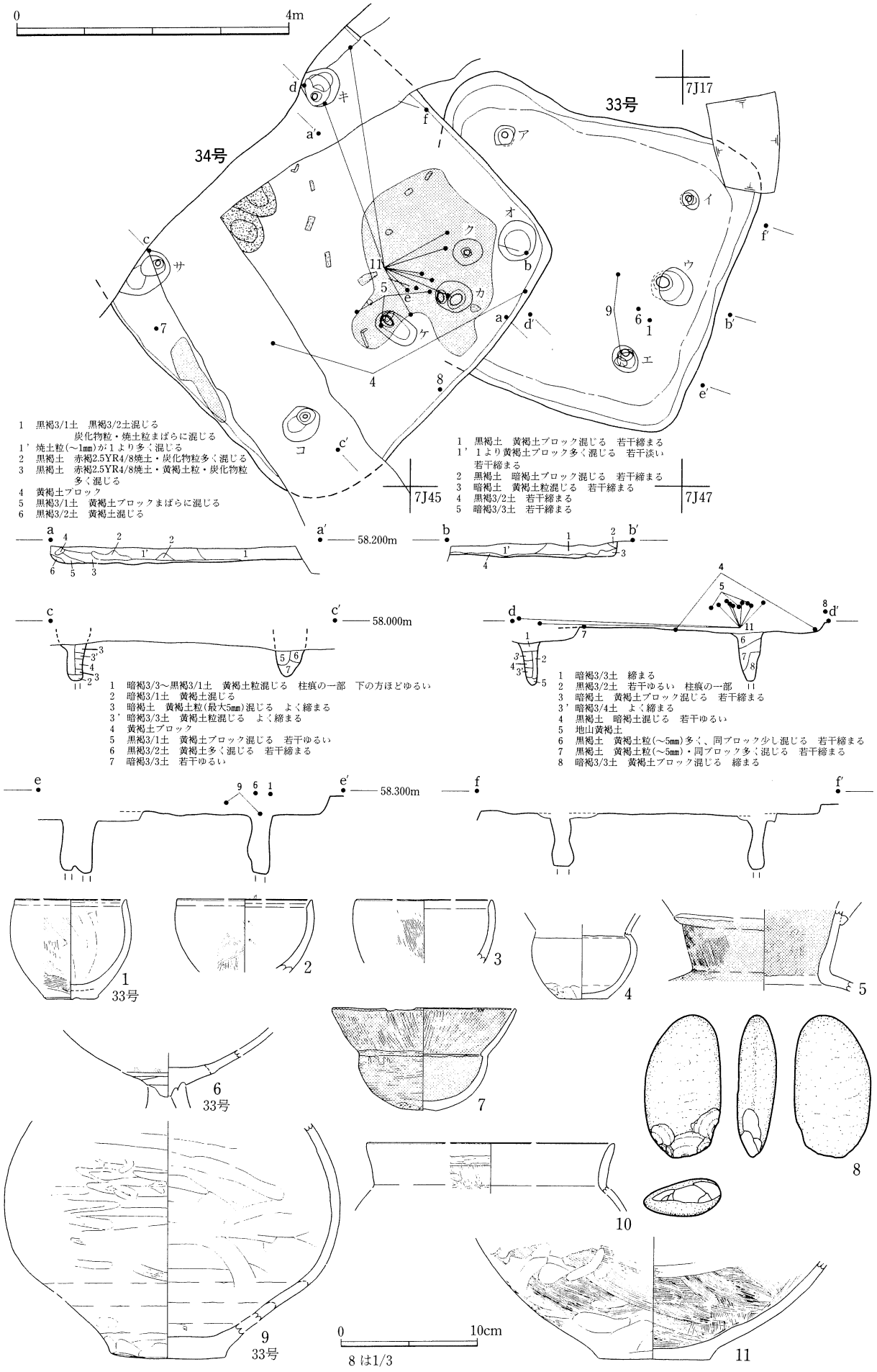
34号竪穴（第10図）

規模：１辺5.5ｍ　深さ北壁0.12ｍ　東壁0.18ｍ　南壁0.07ｍ　床標高：57.85ｍ　主軸方位：315°

10号竪穴と33号竪穴を切り、11号方形周溝に切られる。かたちは正方形に近い。キ・ク・コ・サが



第9図 10号・12号竪穴・出土遺物実測図



第10図 33号・34号竪穴・出土遺物実測図

柱穴、ケがハシゴ穴であろう。床面からの深さは順に、78・71・70・78、20㎝である。33号とは違い、柱穴が見えやすく、柱痕が平面的に確認できたものもあった。

床面構築時の粗掘りの溝が、幅１ｍ前後、深さ15㎝前後で壁沿いを巡る。覆土には焼土・炭化物の粒が多く見られ、床面には炭化材と焼土を含む層の広がりがあった。炉は覆土上面を検出しているときには、北東側の掘形に近い輪郭に見えたが、焼土を掘り下げると、南西にも別の掘形が認められた。竪穴が機能している間に設定し直されたものかもしれない。それぞれ18㎝、20㎝の深さである。

遺物はわりあい多く出土した。小型の鉢（４・７）、複合口縁の大型壺5が含まれることから、古墳時代前期に属すると思われる。

４号竪穴（第11図）

規模：一辺7.3ｍ？　深さ東壁0.26ｍ　床標高：57.9ｍ　主軸方位：327°

調査区の西隅に位置する。ア・エ・クが柱穴と考えられる。床面からの深さは、52・75・66㎝である。柱穴はいずれも断面に明瞭な柱痕を残さず、エ・クの掘形は抜き取りが行われたことを示唆している。竪穴内にはイ・ウ・オ・カ・キの掘り込みが見られたが、本遺構に関係しないものと判断した。炉は柱の間から、若干中央寄りに位置する。炉の覆土は竪穴の覆土と同じで、20㎝の深さであった。なお、平面的には確認できなかったが、北側の土層断面観察によると、東壁直上に、地山に近い土による高まりがあり、そこが焼けたような様子が見受けられた。本遺構に周堤が存在した可能性も考えられよう。

遺物は、炉の近辺を中心に、土器の出土が少なからず認められた。直口壺の体部であろう５・９や、シャープに屈曲する頸部をもつ甕（４・７・６・８）から古墳時代前期の所産だと思われる。

８号竪穴（第11図　遺物は第12図）

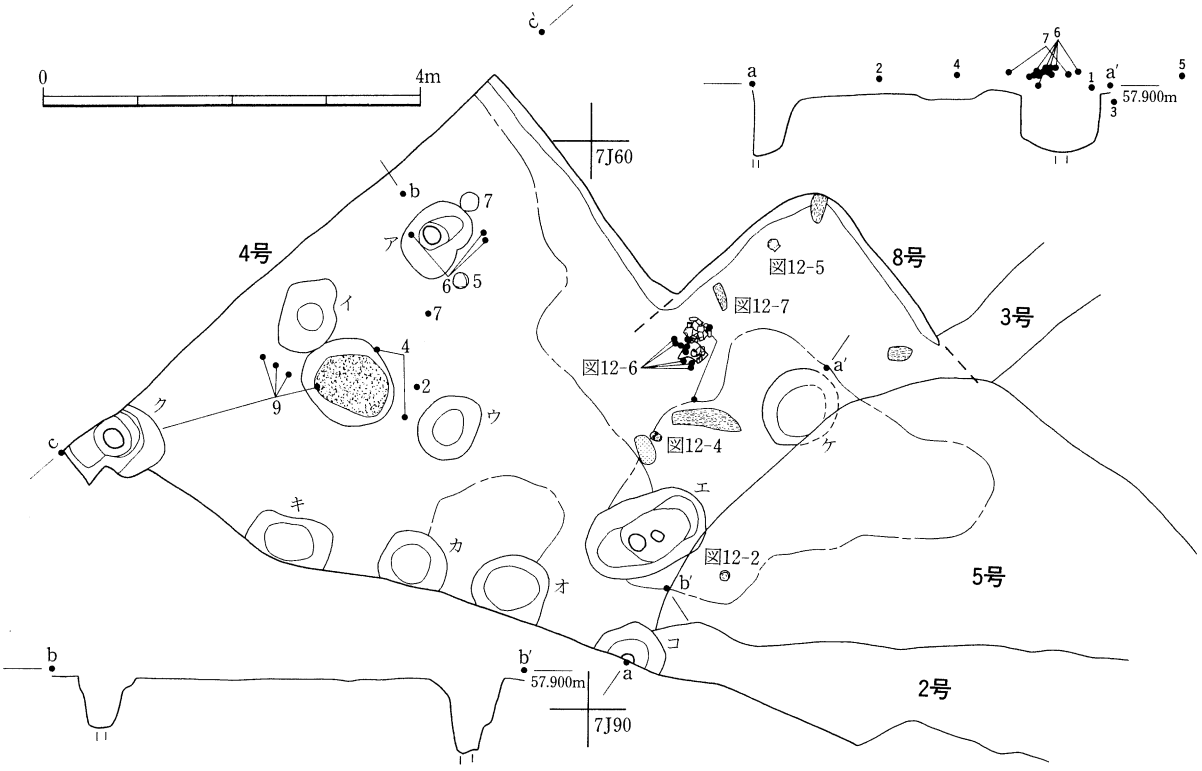
規模：南西・東西軸6.5ｍ？　深さ0.23ｍ　床標高：57.95ｍ　主軸方位：310°

ケ・コが柱穴であろう。それぞれ床面から、61・62㎝の深さである。床面構築土を掘り下げるまで、柱穴は確認できなかった。正方形のプランを想定すると５号竪穴内に検出されなければならないところだが、そこには見あたらなかったので、12号と同じ長方形の比率を与え、南東柱穴は２号中世溝に破壊されたと考えるのが妥当と思われる。

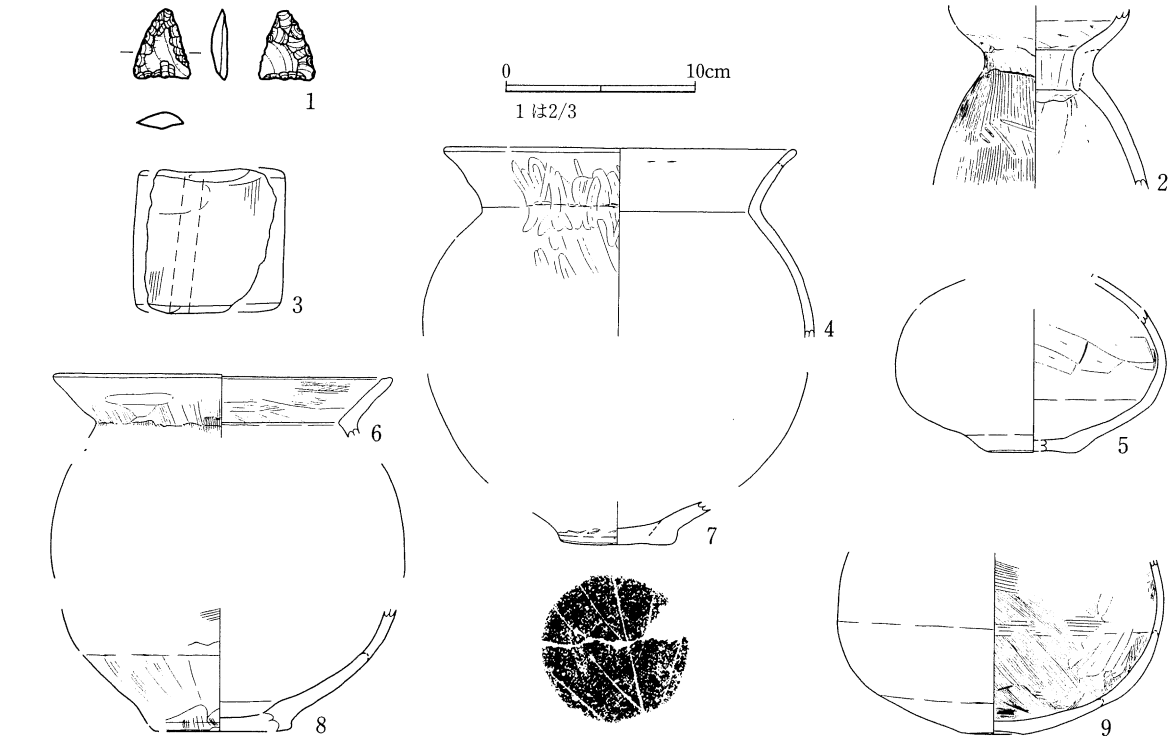
床面の硬化部分は４号竪穴床面の上に重層している。両遺構の覆土がよく似ていたため、掘り下げるまで先後関係が不明だった。しかし、床面から得られた土器・焼土・炭化材が4号竪穴覆土に切り込むことから、本遺構の新しいことは確実である。

遺物は、完形の小型土器（１・２・４・５）と、完形に近く復元のできた甕２個（６・７）が床面直上から得られた。これらから古墳時代前期の遺構と思われる。

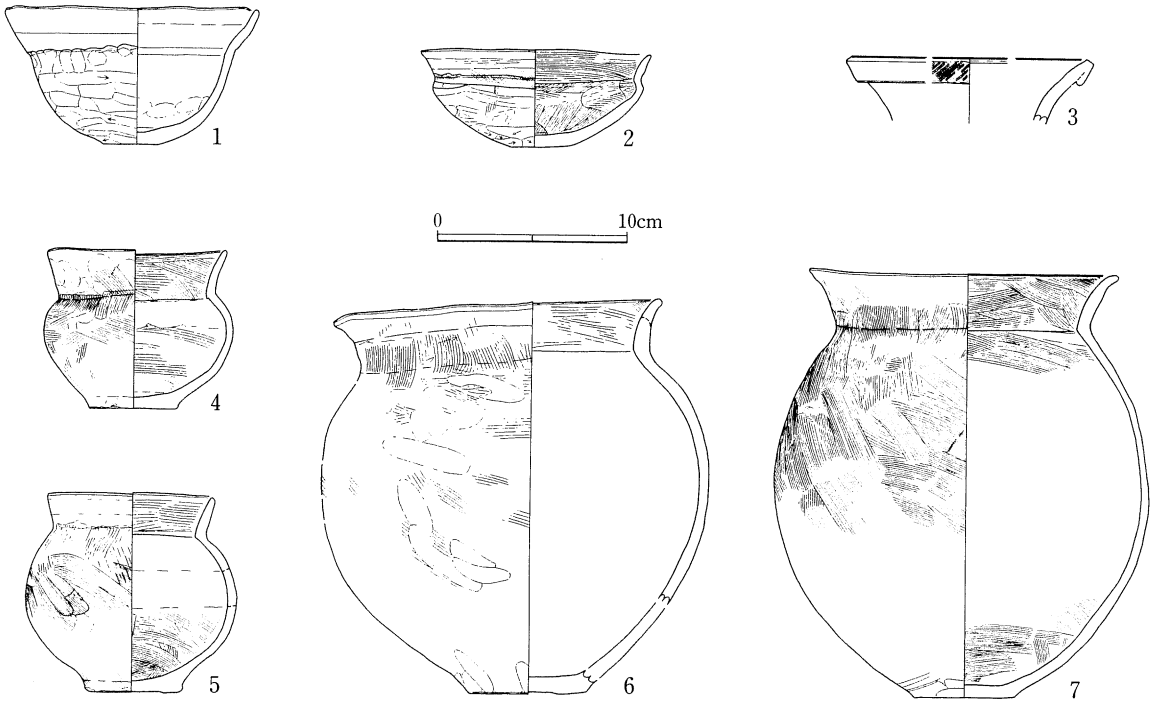
興味深いのは、これらが作風により、器種ごとに、２組に分けられることである。７と比べ６は雑なつくりで、調整も上半の仕上げがハケメと工具ナデとそれぞれ異なる。これは１と２にも当てはまる。４と５は、相対的に長胴の５が７に似ており、焼成時黒斑の様子と、器面の色調が４は６に、５は７に近い。つまり、１・４・６と２・５・７がそれぞれ似ているのである。遺構に未調査の部分と後世に破壊された部分があって、情報自体が確実ではない上に、雰囲気の相違を製作時期の違いと捉



1　表土　黒褐2/2土　ゆるい
2　黒2/1土
3　黒褐3/1土　暗褐土混じる
4　黒2/1土　焼土粒・黒褐3/2土混じる
5　黒褐土　黄褐土粒(1～3㎜)混じる
6　黒褐3/2土　焼土粒・黄褐土ブロック混じる
7　黒褐土　焼土粒・黄褐土・暗褐土混じる
8　黒褐土　暗褐土混じる
9　黒褐土　褐土混じる
10　地山黄褐土
11　赤みがかった暗褐土　地山土が焼けたように見える
12　黒褐3/1土　床面構築土に似る　やや粘性あり
13　黒褐土　暗褐土混じる



第11図　4号・8号竪穴実測図・4号出土遺物実測図



第12図　8号竪穴出土遺物実測図

えてしまえば何も問題はない。だが、もし、一棟の竪穴建物の廃絶に2組の土器の作り手が関わっていたとしたら、この時期の社会集団の内容を探る参考になるものと思われる。

6号（第14図）

規模：柱間2.9m　床標高：57.45m　主軸方位：356°

調査区東端で検出された。炉状の被熱部分があったため、床面まで削平された竪穴建物と判断した。削平は11号・9号構築の際の整地によるものかもしれない。9号内のイと、ウが柱穴と思われる。それぞれ床面から、60・38cmの深さである。また、竪穴掘形を示すような溝が、西側に検出された。

遺物は9号関連のもの以外全く確認されなかったので、時期は不明だが、主軸方位からすると、弥生後期に属する可能性が考えられる。

17号（第2図）

規模：深さ2～10cm　床標高：58.1m　主軸方位：329°

4号・10号との間に位置する。方形であろう。遺物は全く検出されなかった。また、対応する柱穴も確認できなかった。時期は不明だが、竪穴の遺存部と見れば、主軸方位から古墳前期のものの可能性が考えられる。ただ、絶対的な基準でないし、床面の標高がそろわないので、確定はできない。

3．古代の遺構と遺物

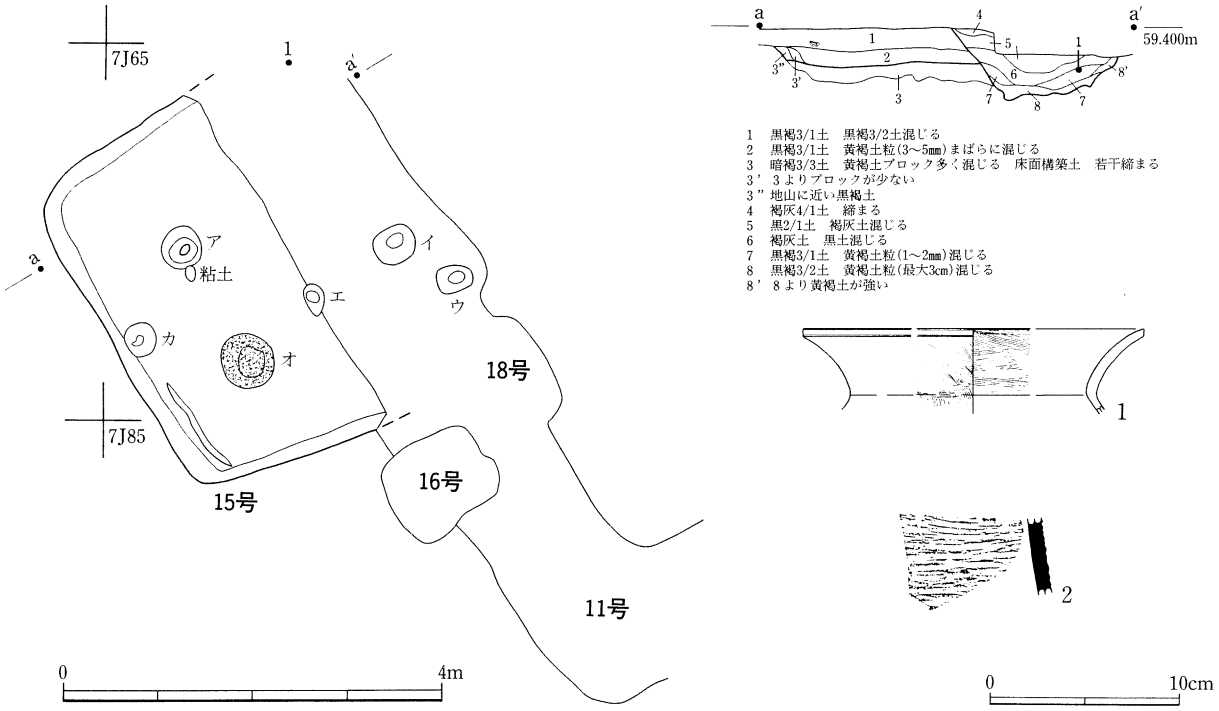
概要　調査区東側の外周沿いに方形周溝が1基、他に竪穴・小竪穴が各1基検出された。1次調査区に検出された遺構群と関係するものであろう。

15号竪穴（第13図）

規模：南北軸4.0m　深さ北壁0.17m　西壁0.17m　南壁0.2m　床標高：57.75m　主軸方位：301°

11号に東半分を破壊される。柱穴は方形に配置されないようで、アとオ、11号内のイをそれと考えた。ア～カはそれぞれ、床面から23・38・36・35・15・27cmの深さである。オは床面精査時に、覆土に焼土が多く認められたため、炉のようにも見受けられた。しかし、アとオの間の地点で、土製支脚が出土したことを考えると、本遺構は元々カマドを持つ竪穴で、オはその柱穴である可能性が高い。1次調査で検出された竪穴のカマドが1棟を除きすべて北側壁に設置されていることからも、そう考えておきたい。奈良・平安時代に属するものと思われる。

遺物は覆土中から須恵器の体部と鉄滓2個が得られた。



第13図　15号竪穴・出土遺物実測図

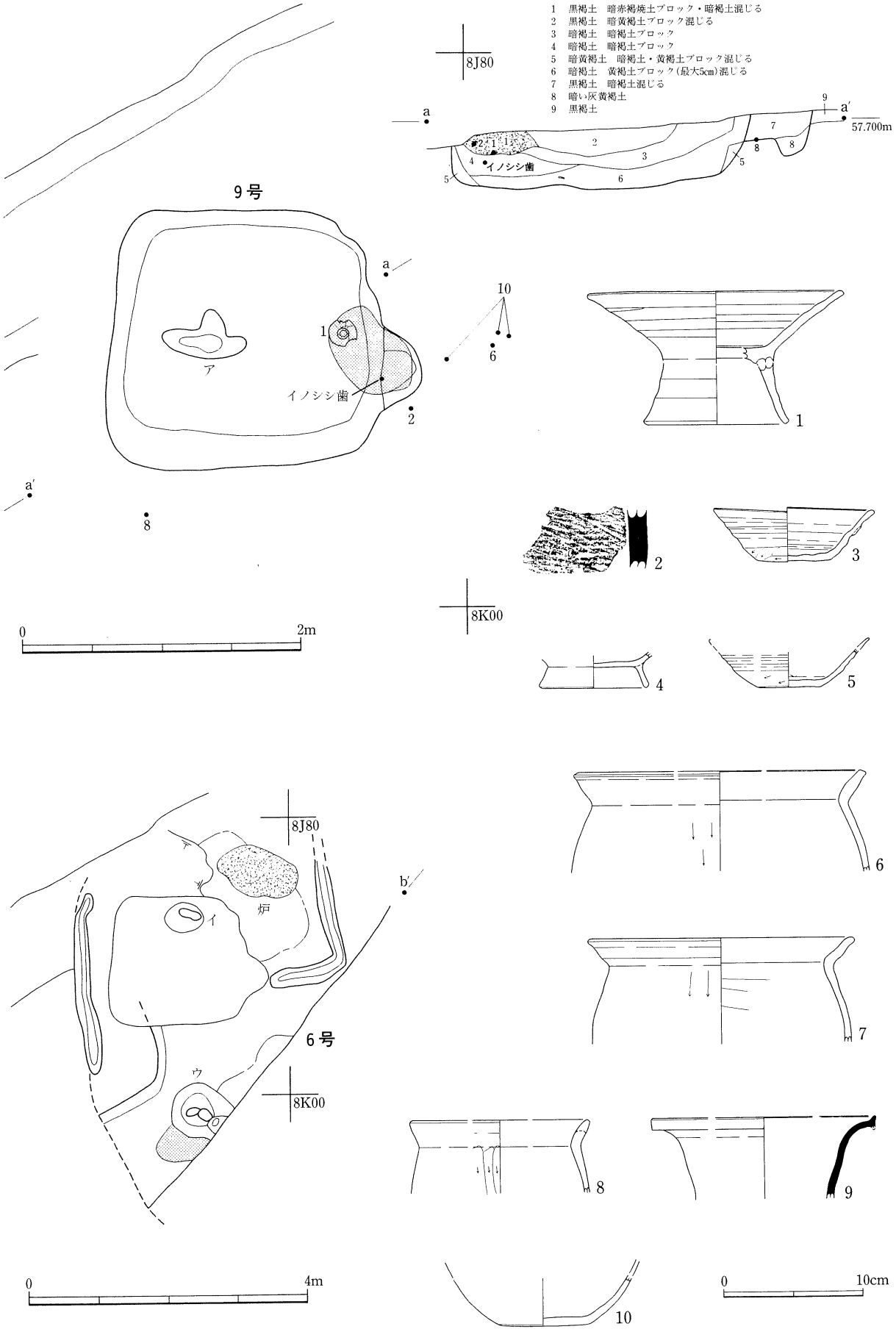
9号小竪穴（第14図上）

規模：東西軸4.0m　南北軸1.88m　深さ北壁0.18m　東壁0.2m　南壁0.21m　西壁0.2m

床標高：57.2m　主軸方位：90°

調査区東端で検出された。6号・11号と切り合う。6号よりは明らかに後出するが、11号とは、切り合う部分がちょうど根により撹乱を受けていたので、先後関係が不明である。アが床面で唯一検出された穴で、9cmの深さである。

東壁には階段状の拡張部分があり、そこに焼土の集中が認められた。焼土中には、ロクロ土師器の高杯1とイノシシの歯（図版10左上）が出土した。高杯には脚部がなく、杯部も底が抜けた状態であった。杯部は逆位で検出され、図のような位置関係でイノシシの歯があった。イノシシの歯は成獣の上下臼歯のエナメル質部分である。両者はうまく噛み合うので、同一個体のものであろう。他には、近辺の竪穴外に甕などの土器が集中して見られた。



第14図　6号・9号竪穴・出土遺物実測図

竪穴の拡張部分の形状からすると、そこがカマドであったとも考えられる。そうすると、焼土と遺物の集中は偶然でなく、何らかの意図を持った活動の結果であったとしても不思議ではないだろう。

本遺構の時期は、ロクロ土師器の形状から、平安時代（10世紀後半）と考えたい。

11号方形周溝（第15図　遺物は第16図１～10）

規模：長軸18.2m　短軸14.0m　底面標高：北東57.87m　南東57.25m　南西57.54m　北西57.69m

主軸方位：301°

調査区東側全体にわたって検出された、幅1.5m前後の方形周溝である。周溝の断面形状は逆台形である。多数の遺構を切り、東辺を31号近世道に切られる。なお、主体部は検出されなかった。周溝内に盛り土とともにあり、後世の削平を受けたのかもしれない。

奈良・平安時代に属するものと思われるが、該期の遺物は５の陶器底部が得られただけである。周溝内の遺物は、ほとんどが古墳前期の土器であった。

４．中世・近世の遺構と遺物

概要　中世と思われる溝が3条、近世の道が１条検出された。規模の割に遺物は少ない。

３号溝（第２図）

規模：深さ0.15m　幅0.8m　底面標高：南西58.0m～北東57.95m

遺物は得られなかった。古墳前期と異なる、黒ずんだ覆土の様子から中世から近世の所産と考えた。32号溝と連絡する可能性もある。

32号溝（第15図）

規模：深さ0.1m　幅1～1.3m　底面標高：北東57.95m～南東57.8m

遺物は覆土中から陶器小皿の口縁が出土したのみである。中世から近世に属する遺構である。

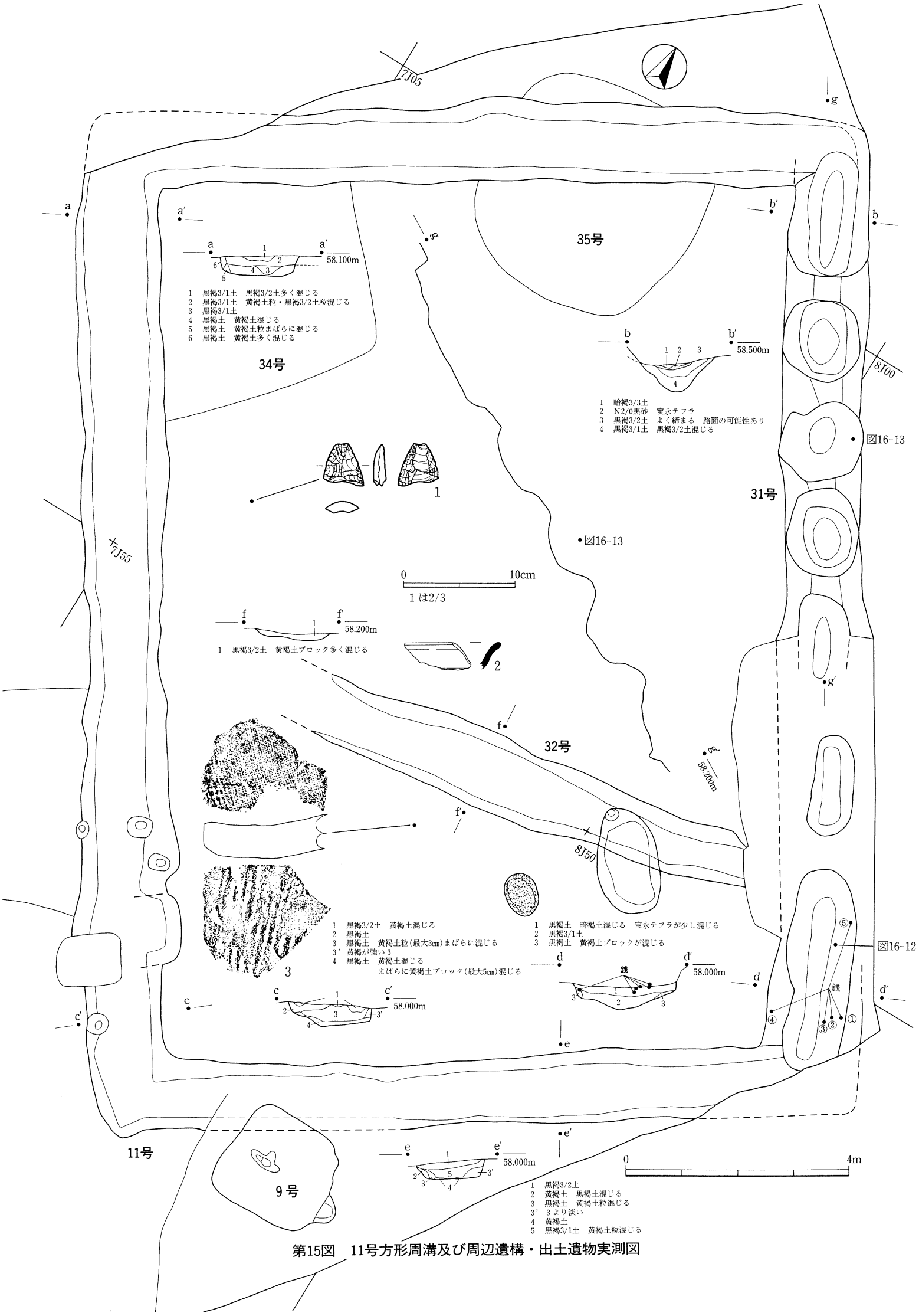
31号道（第15図　遺物は第16・18図）

規模：掘り込みの深さ60cm　底面標高：57.6m

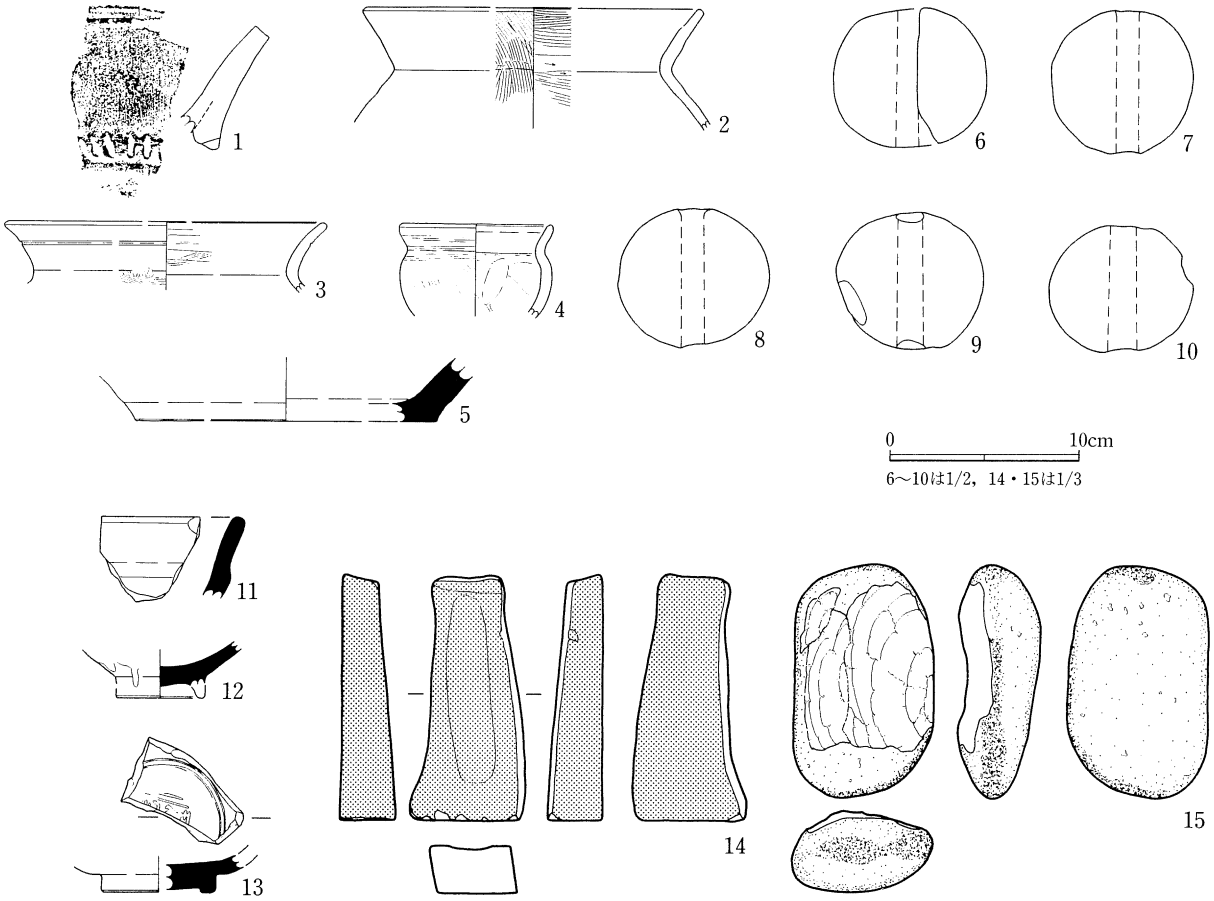
11号の東辺を通り、調査区を縦断する。大きな掘り込みの連続するのが特徴である。７号竪穴などに見られた掘り込みは本遺構のものである。覆土上位から宝永テフラ（宝永四（1707）年降下）が明瞭に検出されているので、上位の路面は18世紀前半まで下るようである。掘り込みの年代は不明であるが、11号方形周溝より後れるのは確かである。

遺物は陶器などが少量得られた。13は内面に刻印を施される青磁椀であるが、胎土が黒ずんでおり、中国製ではないようである。また、覆土上層からではあるが、調査区南東隅より寛永通寶がまとまって出土した。この中には鉄銭が多く含まれていた。寛永通寶の鉄銭が鋳造されるのは、1739年以降というから、宝永テフラを含む層とも矛盾はしない。

本遺構が11号の一辺を借りるかたちで構築されたのは偶然ではないだろう。谷が接する地形を見れば、この台地を南北縦断する際の最短経路が31号に一致するのが分かる。地形自体は11号が構築され



第15図　11号方形周溝及び周辺遺構・出土遺物実測図



第16図　11号・31号出土遺物実測図

る前からそれほど変わらないだろうから、以前に自然発生的な道があり、その道に制約されて方形周溝が作られたに違いない。自然道・方形周溝という前代の土地利用があって、さらに後世にそこが道として利用されたと考えるのが、31号道の形成過程の自然な理解であると思われる。

2号溝（第17図　表4）

規模：深さ0.4～0.6m　幅0.4～2.48m　底標高：西57.445m～中57.32m～東56.6m

傾斜：5.8%（0.845m/14.6m）

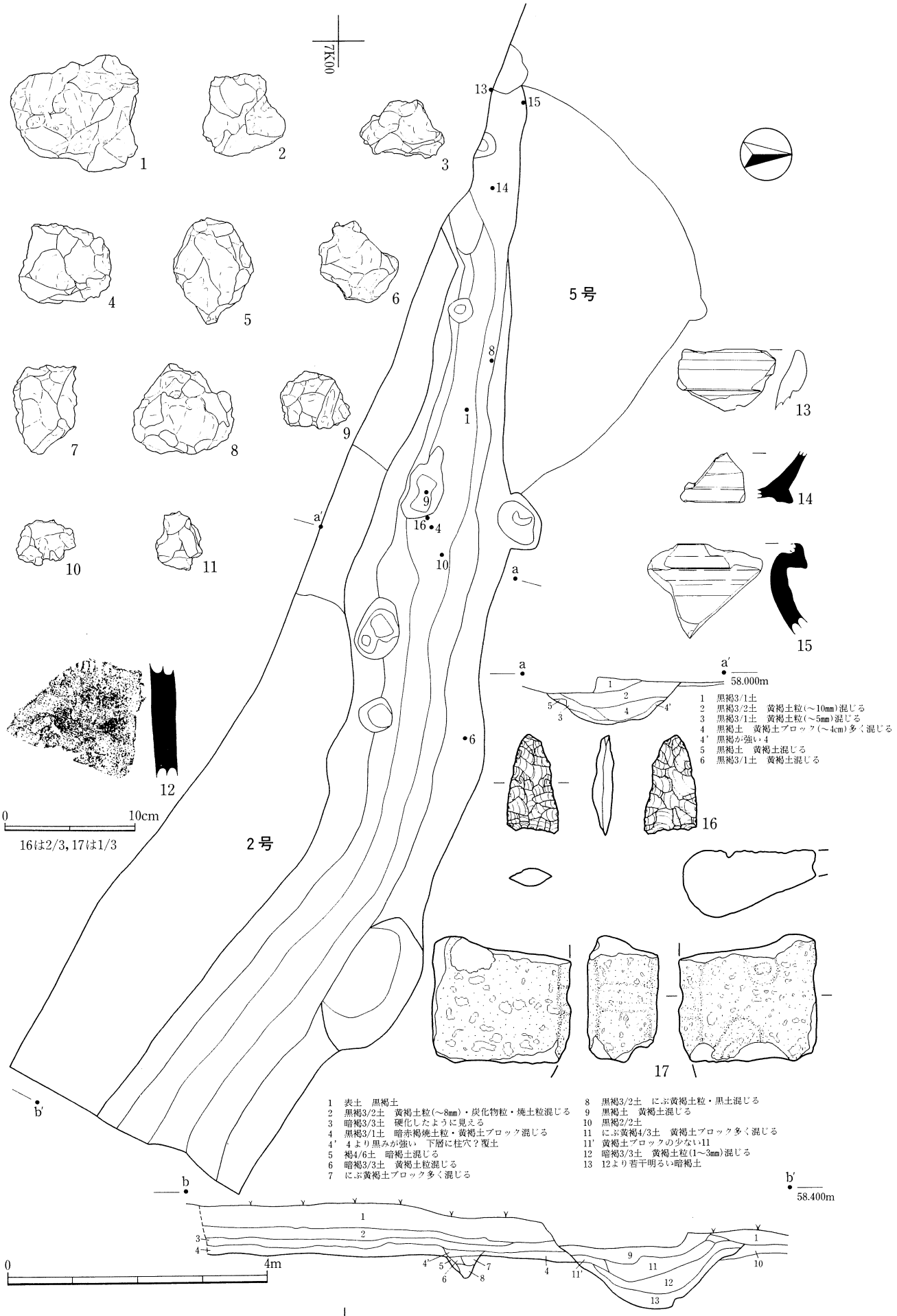
調査区西端を曲流する。断面はゆるい半円形である。堆積状況からは流路・道路としての機能の確認はできなかった。遺物は覆土中から少なからず得られた。中世陶器（12・14・15）がもっとも新しい遺物に見受けられたので、中世に属すると位置づけた。鉄滓が出土しているが、ほぼすべてが椀形鍛冶滓である。形状などから古代から中世にかけてのものである可能性が高い。

5．時期不明の遺構

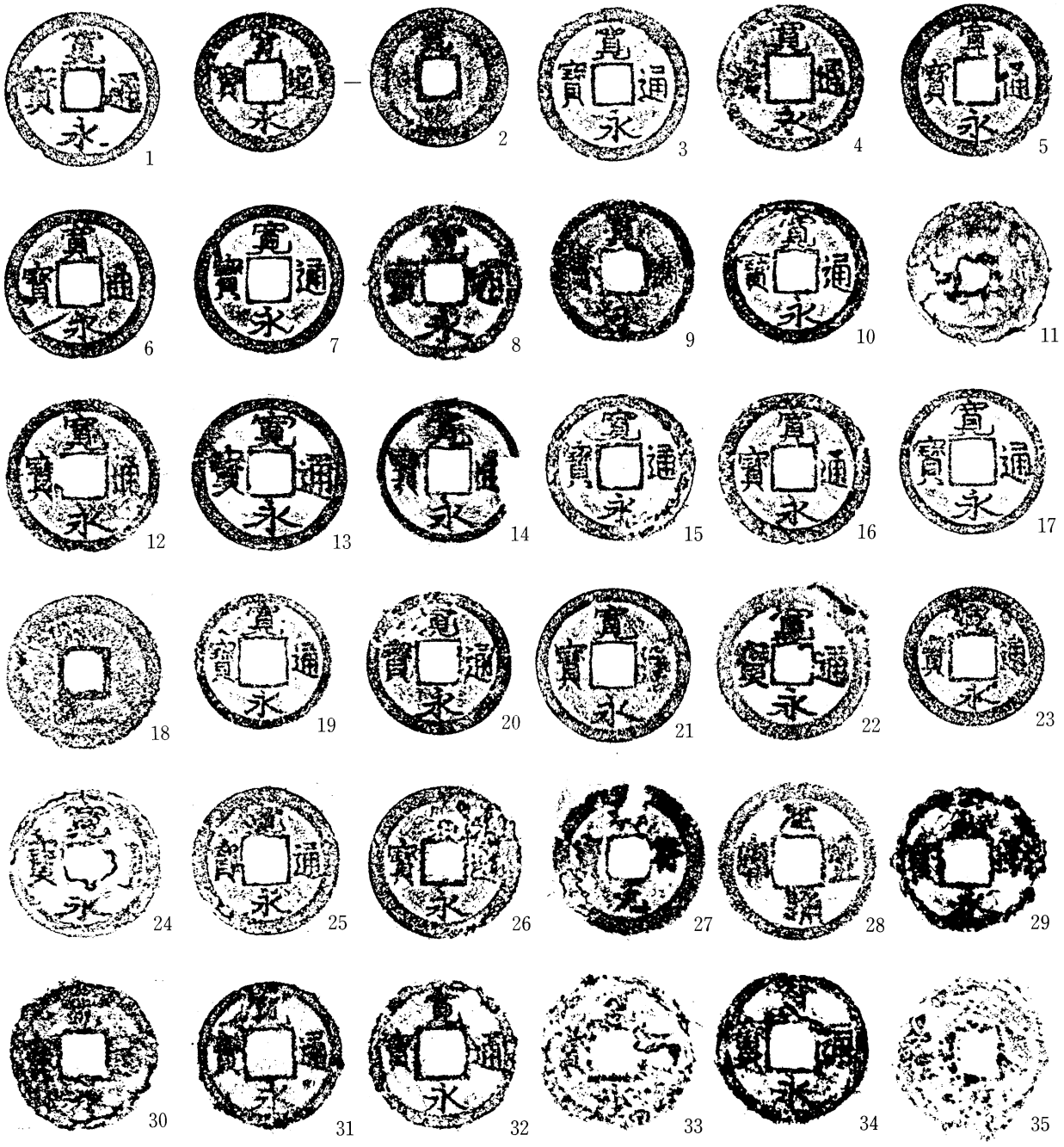
23号土坑（第9図）

規模：長軸1.05m　短軸0.74m　深さ0.55m

12号竪穴の西に検出された。底面からさらに1段下がる形状である。遺物はまったく出土しなかった。形状から16号土坑のような縄文時代の遺構とも思えたが、覆土がかなり黒く、12号古墳前期竪穴



第17図　2号溝・出土遺物実測図



	出土地点	銭貨名	重量(g)	備考		出土地点	銭貨名	重量(g)	備考		出土地点	銭貨名	重量(g)	備考
1	図15－①	寛永通寶	2.6	磁着示す	13	図15－②	寛永通寶	3.3		25	図15－④	寛永通寶	2.1	
2	図15－①	寛永通寶	2.5		14	図15－②	寛永通寶	2.1		26	図15－④	寛永通寶	2.5	
3	図15－①	寛永通寶	3.4		15	図15－②	寛永通寶	2.4		27	図15－②	祥符元寶	1.8	
4	図15－①	寛永通寶	3.1		16	図15－②	寛永通寶	3.0		28	図15－⑤	元豊通寶	2.5	
5	図15－①	寛永通寶	2.8		17	図15－②	寛永通寶	2.6		29	図15－①	寛永通寶(鉄)	2.5	
6	図15－②	寛永通寶	2.8		18	図15－②	寛永通寶	3.1		30	図15－②	寛永通寶(鉄)	2.9	
7	図15－②	寛永通寶	2.8		19	図15－②	寛永通寶	1.7		31	図15－②	寛永通寶(鉄)	2.8	
8	図15－②	寛永通寶	3.5	鉄銭付着	20	図15－②	寛永通寶	2.0		32	図15－③	寛永通寶(鉄)	3.0	
9	図15－②	寛永通寶	2.4		21	図15－②	寛永通寶	2.3		33	図15－③	寛永通寶(鉄)	2.6	
10	図15－②	寛永通寶	2.7		22	図15－②	寛永通寶	6.0	鉄銭付着	34	図15－③	寛永通寶(鉄)	3.0	
11	図15－②	寛永通寶	2.3		23	図15－②	寛永通寶	2.7	磁着示す	35	図15－④	寛永通寶(鉄)	2.9	
12	図15－②	寛永通寶	2.0		24	図15－③	寛永通寶	3.1		他		鉄銭片	29.5	

第18図　31号内銭集中地点出土銭拓影図

を切ることから、古墳前期以降ということしか言えない。柱穴だとしても、列をなさないので、やはり性格・所属時期とも不明である。21号土坑と規模・形状が近い。

21号土坑（第９図）

規模：長軸1.0ｍ　短軸0.7ｍ　深さ0.54ｍ

23号と同様、底面から１段下がる形状を持つ。遺物は出土しなかった。覆土は黄褐色土ブロックが多く混じる黒褐色土で、平面で確認したときは撹乱のように見受けられた。時期・性格とも不明だが、23号と内容が似ているので、両者は近い時期の所産だと思われる。

26号土坑（第９図）

規模：長軸1.04ｍ　短軸0.88ｍ　深さ0.12ｍ

３号溝に切られ、12号竪穴を切る。当初、12号の内部施設と見えたが、覆土が竪穴外まで続いており、別の時期のものだと判断した。遺物は出土していない。時期・性格とも不明である。

６．遺構外出土遺物

上述の通り礫・破砕礫と縄文早期土器片が出土しているほかに、石器がいくつか、他時期の遺構に混入するかたちで得られている。石鏃（図版10右上）・礫斧（第10図－８）・石皿片（第17図－17）がそれである。主に縄文時代早期の遺物と思われる。他には、奈良・平安時代の縄目を持つ平瓦片が方形周構内グリッドから出土した（第15図－３）。11号方形周構に関連するものであろうか。

第３章

まとめ

今回の調査では、狭い調査区ながらも、縄文早期から近世と幅広い時代の遺構が検出できた。その中で特筆すべきなのが、弥生後期後半から古墳前期の遺構群である（仮に久ヶ原式を弥生後期、鴨居上ノ台式を弥生終末期、五領式を古墳前期としておく。）。これは、姉崎六孫王原遺跡・毛尻遺跡、姉崎東原遺跡で検出された弥生後期～古墳前期の集落と、片又木遺跡1次調査区で検出された古墳前期の集落の、空間的にも時期的にも中間に当たるものだと言え、該期の社会動態を探る上で必要な情報を提供するものだと思われる。

検出された遺構を改めて述べると、弥生後期後半の竪穴建物が4棟、弥生終末期が7棟、古墳前期が６棟である。切り合い関係にあったものが、40号と７号、22号と５号、10号と12号、10号と34号、33号と34号、４号と８号、５号と８号、17号と８号で、それぞれ後者が新しい。整理すると、40号→７号、５号→４号・17号→８号、10号→12号・34号の組み合わせができる。

まず、出土遺物の比較的豊富なものを位置づけると、７号は久ヶ原式末、35号が鴨居上ノ台式前半、10号・30号はその後半に当たると思われる。また、８号・34号が五領式であろう。

７号は、床面直上から得られた壺口縁（第６図－５）・鉢（同４）が無文であることから弥生時代後葉、35号の鉢（第７図－９）・無頸壺（同10）は装飾が薄い点で終末期に属すると見受けられる。

35号の壺（同９）は、単節縄文を磨り消した上に描かれる鋸歯状沈線文に結節文帯が付加される文様帯を持ち、共伴した甕（同３）の頸部屈曲もきついので、やはり、弥生終末期に位置づけられそうである。10号は、いわゆる炉器台が、弥生後期に見られる筒状のものと五領式に見られるものとの過渡的な形状である点で、30号は、台付かとも思われる大型鉢（第８図－９）と、覆土中から得られた、口縁端部が強く面取りされる甕（同10）の様子から終末期と考えた。また、34号は、大型の複合口縁壺（第10図－５）と、小型の鉢（同４・７）から、８号は甕（第12図－７）の形状から、古墳前期に当たると思われる。

切り合い関係を定点とし、以上の時期比定を参考にすると、弥生後期後半40号・７号（・６号？・22号?）→弥生終末35号（・５号？・38号？）→弥生終末１号・10号・30号（・39号？）→古墳前期33号・４号・12号・34号・８号（・17号？）という順序で、おおまかな変遷を想定できる。時期的にどこかで断絶があるかもしれないが、とりあえず、今回検出された弥生から古墳時代の竪穴はこのように変遷すると考えられる。

次にこれをふまえて、簡単に周囲の似た時期の遺跡を見てみたい。まず、北北西1.9kmほどに姉崎東原遺跡がある。ここでは弥生中期後半から後期にかけての遺構が中心に検出されている（高橋1990・1993）。また、北西1.2kmほどにある姉崎六孫王原遺跡では弥生時代中期後半から古墳時代後期にかけての集落（居住域・墓域）が検出されている。弥生中期から始まり、数的ピークが弥生後期にあり、古墳後期に向けて減退していくという（半田1997）。六孫王原遺跡に隣接する毛尻遺跡も同じ集落を構成するようで、弥生後期後半から古墳前期の遺構が検出されている（八角他1983）。

片又木遺跡が位置する台地の西側は未調査のため不明であるが、今回の弥生後期後半から古墳前期の竪穴群は前回と比べ密度が高いので、時期を考えなければ、遺跡の中心は２次の方面にあり、１次の方に向かってまばらな分布になると考えられる。今後、迎田コブシ台・不入斗持長台・不入斗高林・不入斗向山各遺跡など台地西部の詳細が明らかになれば、より具体的に把握できることだろう。

以上の各遺跡内における弥生から古墳時代の遺構のあり方をそのまま評価すれば、この期間には時が経るにつれて、内陸へと立地可能域が拡がっていったように見受けられる。

つまり、さらに内陸にある前回調査地において弥生時代の遺構が検出されていないことと、弥生時代から古墳前期にかけてのこのような周囲の動向を合わせて単純に考えると、今回の調査も含めて検出遺構の時期から見た北西から南東への地理的勾配は、弥生から古墳時代にむけて、集落存立に関係する領域が拡がっていった大勢を示していると思われるのである。これは既調査遺跡の局地的な様相を見ての評価なので、当然、広域では一様に言えないが、少なくとも近辺での一般的傾向は反映していると考えたい。

しかし、以上のように概観してみたものの、今回の調査においては竪穴建物跡が検出されたにすぎない。言い換えれば、集落の居住域、それも一部が見出されただけである。いかなる時代の集落も竪穴のみで経営されていたはずがないので、今後、集落動態とその要因がより立体的に想定できるよう、墓域・生産域が明確にされることを期待したい。

寺島　博　　1984『－千葉県市原市－　片又木遺跡』財団法人市原市文化財センター
八角憲章他　1983『千葉県市原市　毛尻遺跡発掘調査報告書』毛尻遺跡調査会
高橋康男　　1990『市原市姉崎東原遺跡』財団法人市原市文化財センター
高橋康男　　1993『市原市姉崎東原遺跡Ｂ地点』財団法人市原市文化財センター
半田堅三　　1997『市原市姉崎六孫王原遺跡』財団法人市原市文化財センター

表2 遺 物 観 察 表

図版番号	出土遺構	種 別	器 種	遺存%	寸法：口／高／底 cm	外面の特徴／色調	内面の特徴／色調	胎 土	焼 成	備 考
5－1	5号竪穴	弥生土器	高杯	30	8.4?／－／－	ヘラミガキ＋工具ナデ／2.5YR4／3にぶ赤褐～5YR5／4にぶ赤褐	ヘラミガキ＋口唇ナデ／2.5YR4／4にぶ赤褐～2.5YR3／3暗赤褐	密 まばらに3㎜礫	良好	
5－2	22号竪穴	弥生土器	炉器台？	40	－／－／9.4?	工具ナデ／5YR5／6明赤褐～7.5YR5／4にぶ褐	工具ナデ 赤彩？／10YR6／6明黄褐～5YR4／6赤褐	やや粗	良好 二次不明	調整粗い
5－3	5号竪穴	軽石	砥石	100	4.65／4.0／－	全面擦られる 刃物によるような切れ込み有り／2.5Y8／3淡黄	－	－	－	9.4 g 床面直上
5－4	19号炉穴	縄文土器	深鉢	30	35?／－／－	擦痕／7.5YR6／6橙～10YR6／3にぶ黄橙～7.5YR5／4にぶ褐	擦痕 剥落有り 図中線以下炭化物付着／2.5Y8／3淡黄～2.5Y5／2暗灰黄～10YR4／1褐灰～黒斑	やや粗	良好 二次有り	
6－1	40号竪穴	弥生土器	甕	5	－／－／－	横の工具ナデ＋口唇両側刺突（単節原体）／10YR5／3にぶ黄褐～10YR5／2灰黄褐	横の工具ナデ／10YR4／2灰黄褐	密	良好	
6－2	40号竪穴	弥生土器	高杯？	20	－／－／－	粗いヘラミガキ／5YR5／4にぶ赤褐～7.5YR5／6褐	丁寧なヘラミガキ／2.5YR5／6明赤褐～10YR6／4にぶ黄橙	密	良好	
6－3	7号竪穴	弥生土器	甑？	40	22.5?／23.2?／7.5	口唇両側刻み＋段円形刺突＋丁寧な工具ナデ＋段以下ヘラミガキ 煤付着／10YR4／2灰黄褐～黒斑	口頸部横のヘラミガキ＋以下横の工具ナデ 下半は摩滅／10YR5／4にぶ黄褐～10YR5／2灰黄褐	密 まばらに最大2㎜のシャモット	良好 二次有り	底部中央が欠ける
6－4	7号竪穴	弥生土器	鉢	20	20?／8.6／8.0?	工具ナデ＋ヘラミガキ 底部稜摩滅 一部に赤彩跡／10YR6／4にぶ黄橙～10YR6／3にぶ黄橙	工具ナデ（ハケメ？）→ヘラミガキ 一部に赤彩跡／10YR5／2灰黄褐～10YR6／3にぶ黄橙	密 スコリア状粒0.5㎜大を普通に含む	良好 二次有り？	
6－5	7号竪穴	弥生土器	壺	80	13.5?／8.4／－	拡張部縄文原体による刺突＋工具ナデ→ヘラミガキ 頸部破断面が軽く磨られる／5YR5／4にぶ赤褐～7.5YR5／4にぶ褐～10YR5／3にぶ黄褐～黒斑	密なヘラミガキ＋頸部以下ナデ／7.5YR6／4にぶ橙～5YR6／6橙～黒斑	密 まれに3㎜大の礫	良好	転用器台
6－6	7号竪穴	弥生土器	壺？	20	－／－／10?	ヘラミガキ＋ナデ 焼成前穿孔／7.5YR6／4にぶ橙～7.5YR5／2灰褐	／7.5YR5／2灰褐	密 まれに最大2㎜のシャモット、5㎜礫	良好	
6－7	7号竪穴	弥生土器	甕	5	－／－／－	輪積み痕 ナデ＋段刺突／5YR5／6明赤褐	横の工具ナデ→横のヘラミガキ／同外	密 まれに1㎜大の砂粒	良好	
6－8	7号竪穴	古式土師器	甕	5	－／－／－	ハケメ 煤付着／黒	ナデ／7.5YR5／4～黒	密 1㎜大の粒が目立つ	良好 二次有り	
6－9	7号竪穴	石	敲き石	50	長6.9幅4.6厚4.4	／5Y5／2灰オリーブに黒の筋が入る	－	－	－	196.9 g チャート
7－1	39号竪穴	古式土師器？	甕	5	19.4?／－／－	ハケメ 口唇弱く面取り／7.5YR5／3にぶ褐～10YR4／2灰黄褐（黒斑）	横ハケメ→横ヘラミガキ／7.5YR6／4にぶ橙	密 まれに3㎜の礫	良好 二次あり？	
7－2	39号竪穴	古式土師器？	甕	15	13.2?／－／－	横工具ナデ 口唇丸い／10YR6／3にぶ黄橙～黒（煤・黒斑）	丁寧な横ヘラミガキ／10YR6／4にぶ黄橙～10YR5／3にぶ黄褐（煤）		良好 二次あり	段部の位置に接合痕
7－3	35号竪穴	弥生土器	甕	90	13／15.5?／7.5	工具ナデ→ヘラミガキ 段工具による刺突 下半が赤変／10YR6／4にぶ黄褐～10YR3／1黒褐～5YR5／6明赤褐～黒斑	上方ナデ 下方工具ナデ 底面荒れ／10YR6／4にぶ黄褐～10YR5／2灰黄褐	密 まばらに最大2㎜のシャモット	良好 二次あり	

図版番号	出土遺構	種　別	器　種	遺存%	寸法：口／高／底 cm	外面の特徴／色調	内面の特徴／色調	胎　土	焼　成	備　考
7－4	35号竪穴	弥生土器	鉢	50	23.5／10.7／8.5	工具ナデ／5YR3／4暗赤褐～7.5YR4／4褐～2.5YR3／6暗赤褐	工具ナデ+ナデ／10YR3／2黒褐～75YR4／6褐～7.5YR3／4暗褐	やや粗　まばらに最大3㎜のシャモット	良好	
7－5	35号竪穴	弥生土器	壺	5	－／－／－	上から単節RL・同LR・同RL横回転／10YR6／4にぶ黄橙～10YR7／4にぶ黄橙	ナデ・工具ナデ／10YR7／4にぶ黄橙	密	良好	破断面が磨られている
7－6	35号竪穴	弥生土器	鉢	5	－／－／－	上から単節LR・同RL・同LR・同RL横回転／10YR6／4にぶ黄橙	赤彩・ヘラミガキ／2.5YR3／4暗赤褐	精緻	良好	
7－7	35号竪穴	弥生土器	壺	20	11.8／－／－	縦ヘラミガキ／7.5YR5／4にぶ褐～黒斑	上方横ヘラミガキ・下方横工具ナデ／10YR6／6明黄褐	精緻	良好	
7－8	35号竪穴	土製品	棒状	100	長3.0　径0.9	手捏／10YR4／1褐灰		密	良好	3.4 g
7－9	35号竪穴	弥生土器	壺	60	－／23?／7	上から無節RZ字状結節文（RSも混じる）・赤彩・無節RZ結節・単節LR横・無節RZ結節・赤彩・（単節LR横→磨り消し→ヘラ描き山形文→赤彩・ヘラミガキ）・無節RS結節・（単節RL横→磨り消し→ヘラ山形文→赤彩・ヘラミガキ）・無節RS結節・赤彩・横ヘラミガキ／2.5YR3／4暗赤褐～7.5YR6／6橙～黒斑	上方横工具ナデ　下方ナデ／10YR5／4にぶ黄褐～10YR3／2黒褐（黒斑）	やや粗　まばらに2～3㎜の礫	良好	底部などかなり摩滅する
7－10	35号竪穴	弥生土器	無頸壺	70	12～17／21.4／8.5	口径がかなり歪む　上方横工具ナデ・下方底部から放射状に工具ナデ／7.5YR6／4にぶ橙～10YR6／4にぶ黄橙	横工具ナデ・ナデ／10YR5／3にぶ褐～7.5YR3／3暗褐	やや粗　ふつうに1㎜大の砂粒、まばらに1～5㎜大シャモット	良好	雑なつくり　擬口縁ではない
7－11	35号竪穴	弥生土器	壺	50	－／－／8?	工具ナデ　赤彩の跡あり／5YR4／6赤褐～7.5YR6／6橙～黒斑	ナデ／7.5YR6／6橙～7.5YR5／4にぶ褐	密　1～2㎜のシャモット、1㎜のスコリア状粒が多い	良好	底部稜が摩滅する
8－1	1号竪穴	古式土師器	鉢	5	－／－／－	上から単節RL横回転・同LR・縄文原体による刺突・赤彩・ヘラミガキ／10YR7／4にぶ黄橙～2.5YR4／4にぶ赤褐	赤彩・ヘラミガキ／2.5YR5／4にぶ赤褐	密	良好	
8－2	1号竪穴	縄文石器	打製石鏃	100	長1.7幅1.1厚0.4	－	－	－	－	0.5 g　黒曜石　未製品
8－3	1号竪穴	古式土師器	高杯	60	－／－／13.1	縦ヘラミガキ・ナデ中位に透孔／2.5YR3／6暗赤褐(赤彩？)～5YR4／4にぶ赤褐～黒斑	ナデ　ヘラミガキ／2.5YR4／6（赤彩？）～黒斑	密	良好　破片化後の二次あり	
8－4	1号竪穴	古式土師器	壺	20	10／－／－	ハケメ→ヘラミガキ　口唇平坦、口縁内湾／5YR6／6橙～黒斑	くびれ以上縦ヘラミガキ、以下工具ナデもしくはヘラケズリ／5YR5／6明赤褐～10YR4／2灰黄褐（黒斑）～10YR7／3にぶ黄橙	密　まれに2㎜の礫	良好　二次あり？	
8－5	1号竪穴	古式土師器	甕	10	16.4?／－／－	工具ナデ+ナデ　口唇ゆるい面取り／7.5YR6／4にぶ橙～7.5YR5／3にぶ褐	横ハケメ→ナデ／7.5YR6／4にぶ橙～7.5YR5／3にぶ褐	やや粗　1㎜の赤褐色粒を含む	良好　二次あり？	

図版番号	出土遺構	種　別	器　種	遺存%	寸法：口／高／底 cm	外面の特徴／色調	内面の特徴／色調	胎　土	焼　成	備　考
8－6	30号竪穴	古式土師器	壺	10	14.4?／－／－	口縁部ハケメ→ヘラミガキ・ナデ　以下工具ナデ→ヘラミガキ／2.5YR4／3にぶ赤褐～2.5YR3／4暗赤褐（赤彩？）	？→丁寧なヘラミガキ／2.5YR3／4暗赤褐～2.5YR2／2極暗赤褐（赤彩？）		良好	
8－7	30号竪穴	弥生土器	壺	5	－／－／－	単節 LR 縦回転・単節 LR 横回転・同 RL →磨り消し→ヘラ描き山形文／2.5YR3／3暗赤褐(赤彩)～2.5YR4／2灰黄褐	ナデ／7.5YR6／6橙	密	良好	
8－8	30号竪穴	弥生土器	壺	5	－／－／－	単節 LR 横回転→磨り消し→ヘラ描き山形文→無節 RS 字状結節文　赤彩／7.5YR6／6橙～2.5YR5／6明赤褐	ナデ／7.5YR5／4にぶ褐	密	良好	破断面が磨られている
8－9	30号竪穴	古式土師器？	鉢	30	20.8?／－／－	くびれ以上縦ヘラミガキ　以下横ヘラミガキ／10YR6／3にぶ黄橙～10YR5／3にぶ黄褐	くびれ以上縦ヘラミガキ 以下ナデもしくは工具ナデ／7.5YR5／4にぶ褐～10YR5／4にぶ黄褐	やや粗　1～3㎜の砂粒含む	良好	
8－10	30号竪穴	古式土師器？	甕	5	－／－／－	口唇シャープな面取り　ハケメ→ナデ／7.5YR5／3にぶ褐	横ハケメ→ナデ／10YR6／3にぶ黄橙	密　最大1.5㎜の黄褐色粒目立つ	良好　二次あり？	
8－11	30号竪穴	古式土師器？	壺	60	－／－／8.3	ハケメ→工具ナデ　底部木葉痕／7.5YR6／6橙～7.5YR4／1褐灰～黒斑	ナデ+工具ナデ／7.5YR6／6橙	密　最大2㎜の明褐色粒が目立つ、まばらに最大3㎜礫	良好	
8－12	30号竪穴	古式土師器？	高杯？	40	－／－／8.7?	工具ナデ　指圧痕／7.5YR6／6橙～5YR5／6明赤褐	ナデ／7.5YR6／6橙～黒斑	やや粗　1㎜までの灰白色粒が目立つ	良好	つくりが粗い
9－1	12号竪穴	古式土師器	高杯	70	－／－／－	ハケメ→ナデ／10YR6／4にぶ黄橙～10YR4／2灰黄褐(煤？)	受け部ヘラミガキ　脚部ハケメ／5YR6／6橙（赤彩？）～10YR5／3にぶ黄褐	密	良好	
9－2	10号竪穴	弥生土器	甕	10	15.5?／－／－	工具ナデ　口唇工具による外側のみの刻み／10YR2／1黒(煤・黒斑)	ヘラミガキ／7.5YR5／4にぶ褐～10YR3／1黒褐	密	良好　二次あり	
9－3	10号竪穴	古式土師器	甕	25	13.8?／－／－	粗いハケメ→ナデ・横ナデ／10YR6／4にぶ黄橙～7.5YR6／6橙～黒斑	口縁ハケメ→ナデ・横ナデ　以下ナデ／10YR6／4にぶ黄橙～7.5YR6／6橙～黒斑	密	良好	
9－4	10号竪穴	古式土師器	甕	10	13.9?／－／－	工具ナデ→ナデ／5YR5／6明赤褐	口縁ハケメ　以下ナデ／5YR5／6明赤褐～5YR4／6赤褐	やや粗　2㎜のシャモット	良好	粗いつくり
9－5	10号竪穴	古式土師器	壺	30	17?／－／－	口縁横ナデ　以下ナデ　口縁下端工具による刻み／2.5YR5／6明赤褐（赤彩？）～7.5YR6／6橙～7.5YR5／3にぶ褐～10YR6／4にぶ黄橙	ヘラミガキ／10YR6／3にぶ黄橙～2.5YR4／6赤褐（赤彩？）	密　最大3㎜の礫・シャモット	良好　破片化後の二次あり	
9－6	10号竪穴	古式土師器	鉢	10	9.5?／－／－	ハケメ・赤彩／7.5YR3／6暗赤（赤彩）～10YR5／3にぶ黄褐	ナデ・赤彩・ヘラミガキ／2.5YR4／4にぶ赤褐（赤彩）～10YR5／3にぶ黄褐	密　まれに1～2㎜の砂粒	良好	
9－7	10号竪穴	古式土師器	甕	10	19.8?／－／－	ハケメ→ナデ／10YR6／1褐灰	ナデ／10YR5／1褐灰～10YR6／1褐灰	密　まばらに最大1㎜の砂粒	良好　二次あり	須恵器のように焼け締まる
9－8	10号竪穴	古式土師器	小型器台	100	7.8／7.65／10.2	透孔3方　口縁端部が大体欠ける　ヘラミガキ／5YR6／6橙～2.5YR5／6明赤褐	受け部ヘラミガキ　脚部ナデ　脚柱に孔が通る／5YR6／6橙	密　2～3㎜の砂粒・シャモットが目立つ	良好	

図版番号	出土遺構	種　別	器　種	遺存%	寸法：口／高／底cm	外面の特徴／色調	内面の特徴／色調	胎　土	焼　成	備　考
9－9	10号竪穴	古式土師器	高杯	70	－／－／15.6?	透孔3方　ヘラミガキ／10YR6／4にぶ黄橙～10YR7／4にぶ黄橙～黒斑	ハケメ／外面と同じ	密　まばらに最大2㎜のシャモット	良好	
9－10	10号竪穴	鉄製品	鉄鏃	100	長さ4.25　幅2.1 厚さ身0.25茎0.7	定角式	－	－	－	4.5ｇ　覆土一括遺物中に確認
9－11	10号竪穴	古式土師器	炉器台	95	7.2?／12.1／12	ハケメもしくは工具ナデ→ナデ／7.5YR5／4にぶ黄橙～10YR6／3にぶ黄橙	工具ナデ→ナデ　指圧痕／10YR6／4にぶ黄橙～10YR4／2灰黄褐	密　まばらに最大5㎜のシャモット	良好　二次あり	若干歪む
9－12	10号竪穴	古式土師器	炉器台	40	4.3?／11.6／13.5?	細かいハケメ・ナデ／7.5YR6／4にぶ橙～10YRにぶ黄橙	ハケメ→工具ナデ／10YR6／4にぶ黄橙～10YR4／2灰黄褐	密	良好　二次あり？	
9－13	10号竪穴	古式土師器	炉器台	70	8?／－／－	受け部横ハケメ　受け部中位以下縦の工具ナデ／10YR5／4にぶ黄褐～5YR4／3にぶ赤褐	受け部ハケメ→ナデ　脚部上位工具による掻き取り→工具ナデ→ナデ	やや粗　3㎜の礫が普通に混じる	良好　二次あり	
10－1	33号竪穴	古式土師器	鉢	40	8.1?／7.35／3.6	ハケメ・ナデ　底部籾圧痕／10YR5／3にぶ黄褐～10YR5／2灰黄褐～黒斑	工具ナデ・ナデ／7.5YR5／4にぶ褐～7.5YR4／2灰褐	密　まばらに3㎜のシャモット	良好	
10－2	34号竪穴	古式土師器	鉢	40	9.8?／－／－	ハケメ・ナデ／10YR6／4にぶ黄橙～10YR5／4にぶ黄褐～黒斑	工具ナデ・ナデ／7.5YR6／6橙～黒斑	密　まばらに1㎜の砂粒	良好	
10－3	34号竪穴	古式土師器	鉢	20	9.8?／－／－	ハケメ→工具ナデ・ナデ／7.5YR4／2灰褐～5YR6／6橙	ナデ・工具ナデ／7.5YR5／3にぶ褐～7.5YR5／4にぶ褐	密　まばらに最大2㎜のシャモット	良好　二次あり？	
10－4	34号竪穴	古式土師器	小型壺	80	－／－／3.6	ナデ　底部付近工具ナデもしくはヘラケズリ／7.5YR5／4にぶ黄褐～黒斑	ナデ／7.5YR4／3褐～黒斑	密　まばらに最大3㎜の砂粒	良好	粉々に近い状態で出土
10－5	34号竪穴	古式土師器	壺	80	－／－／－	貼り付け部分ナデ以外ハケメ・赤彩・ヘラミガキ／7.5YR3／6暗赤褐～2.5YR4／4にぶ赤褐（赤彩）	くびれ以上ハケメ→ヘラミガキ　以下ナデ・指圧痕／10YR6／4にぶ黄橙～10YR3／2黒褐	やや粗　まばらに1㎜の砂粒・シャモット	良好　二次あり	
10－6	33号竪穴	古式土師器	高杯	60	－／－／6.8	ハケメ・工具ナデ／10YR6／4にぶ黄橙～10YR5／3にぶ黄褐	ナデ・ヘラミガキ／10YR5／2灰黄褐～10YR6／4にぶ黄褐	密	良好	
10－7	10号竪穴	古式土師器	小型鉢	50	13.3?／7.65／2.8?	赤彩・ヘラミガキ　底部付近工具ナデ　若干くぼむ／10YR4／6赤～10YR7／4にぶ黄橙	口縁ナデ→ヘラミガキ　以下ナデ／10YR5／6赤～5YR6／6橙	密　5㎜の礫がわずかに混じる	良好	
10－8	34号竪穴	縄文石器	礫斧	100	長7.8幅4.2厚2.2	端部敲打痕／5Y6／3オリーブ黄	－	－	－	88.9ｇ
10－9	33号竪穴	古式土師器	壺	40	－／－／8.4	工具ナデ→ヘラミガキ／10YR7／4にぶ黄橙～10YR6／4にぶ黄橙～7.5YR6／6橙～黒斑	工具ナデ・ナデ／7.5YR6／6橙	密	良好	
10－10	34号竪穴	古式土師器	甕	20	18?／－／－	ハケメ・ナデ／10YR4／3にぶ黄褐～10YR2／1黒褐（煤）	横工具ナデ→ヘラミガキ／10YR5／4にぶ黄褐～5YR3／6暗赤褐～黒（煤）	密　まれに最大2㎜の砂粒	良好　二次あり	
10－11	34号竪穴	古式土師器	甕	70	－／－／8.2	ハケメ→工具ナデ・ナデ／7.5YR5／4にぶ褐～10YR5／4にぶ黄褐～黒斑	ハケメ／10YR5／4にぶ黄褐～10YR5／3にぶ黄褐	密　まれに2㎜の砂粒・シャモット	良好　破片化後の二次あり	
11－1	4号竪穴	縄文石器	打製石鏃	100	長1.5幅1.1厚0.3	－	－	－	－	0.3ｇ　黒曜石
11－2	4号竪穴	古式土師器	炉器台	60	－／－／－	受け部工具ナデ　以下ハケメ　赤彩の可能性あり／10YR4／3にぶ黄褐～5YR4／4にぶ赤褐～10YR4／2灰黄褐	工具ナデ・ナデ　脚部内に赤色顔料？が鹿の子模様状に付いている／10YR5／3にぶ黄褐～5YR5／6明赤褐	密	良好	

図版番号	出土遺構	種　別	器　種	遺存%	寸法：口／高／底 cm	外面の特徴／色調	内面の特徴／色調	胎　土	焼　成	備　考
11－3	4号竪穴	土製品	土錘	40	径4.0　孔径0.5	縦ハケ→ナデ／10YR6／3にぶ黄橙～10YR5／2灰黄褐	孔が中心をはずしている	密	良好	21.8g
11－4	4号竪穴	古式土師器	甕	60	18.4?／－／－	ナデ→ヘラミガキ／10YR2／1黒（煤・黒斑）～10YR5／4にぶ黄褐	ナデ／7.5YR5／4にぶ褐～10YR4／2灰黄褐～5YR5／6暗赤褐	密　まばらに3㎜の礫	良好	11－8底部と同一個体である可能性が高い
11－5	4号竪穴	古式土師器	壺	60	－／－／4.7	工具ナデ→丁寧なヘラミガキ／2.5YR3／6暗赤褐～7.5YR5／4にぶ褐～黒斑	上半工具ナデ　下半ナデ／7.5YR6／3にぶ褐～5YR5／6明赤褐～黒斑	密　まれに3㎜の礫	良好	
11－6	4号竪穴	古式土師器	甕	45	17.6／－／－	ハケメ→横ナデ／7.5YR2／1黒（煤・黒斑）～10YR5／3にぶ黄褐	ハケメ→横ナデ／5YR5／4にぶ赤褐	密　最大2㎜の砂粒・シャモットが混じる	良好	11－9と同一個体である可能性が高い
11－7	4号竪穴	古式土師器	甕	80	－／－／5.8	工具ナデ・ナデ　底部に木葉痕／5YR5／3にぶ赤褐～5YR3／1黒褐（煤）	ナデ　底部ドーナツ形にくぼむ／5YR6／4にぶ橙	密	良好　二次あり	11－5と同一個体である可能性が高い
11－8	4号竪穴	古式土師器	甕	35	－／－／7.2?	ハケメ→ナデ10YR3／2黒褐～黒（煤）	丁寧な工具ナデ・ナデ／7.5YR5／4にぶ褐～7.5YR3／2黒褐	やや粗　最大2㎜の明黄褐粒・シャモット・礫が目立つ	良好　二次あり	11－7と同一個体である可能性が高い
11－9	4号竪穴	古式土師器	壺	55	－／－／3.5	ナデ→丁寧なヘラミガキ　底部若干くぼむ／7.5YR6／4にぶ橙～10YR5／3にぶ黄褐～黒斑	ハケメ・工具ナデ／10YR6／4にぶ橙～10YR5／3にぶ黄褐～黒斑	精緻	良好　破片化後の二次あり	薄手で丁寧なつくり
12－1	8号竪穴	古式土師器	小型鉢	60	13～14／7.2／2.9	口縁横ナデ　以下工具ナデ／7.5YR6／6橙～10YR5／4にぶ黄褐～10YR6／3にぶ黄橙～黒斑	ナデ　強い指圧痕／7.5YR6／6橙～10YR6／4にぶ黄橙	密　2㎜のシャモット・砂粒が普通に混じる	良好	12－6と雰囲気が似る
12－2	8号竪穴	古式土師器	小型鉢	100	12.1／5.2／2.9	口縁ハケメ→横ナデ以下ハケメ→工具ナデ→部分的にヘラミガキ／7.5YR5／410YR5／4にぶ黄褐～黒斑	ハケメ→部分的にナデ／10YR5／4にぶ黄褐～黒斑	密	良好	
12－3	8号竪穴	弥生土器	壺	10	12.5?／－／－	口縁単節LR横回転／7.5YR5／4にぶ褐	ナデ／7.5YR5／4にぶ褐～7.5YR6／4にぶ橙	密	良好	混入
12－4	8号竪穴	古式土師器	小型甕	100	9.2／8.4／4.7	口縁ハケメ→横ナデ体部上半ハケメ　下半ハケメ→ナデ／10YR5／3にぶ黄褐～5YR5／4にぶ赤褐～黒斑	10YR5／3にぶ黄褐～黒斑	密	良好	
12－5	8号竪穴	古式土師器	小型甕	100	8.6／10.5／5.3	口縁ハケメ→丁寧な横ナデ　体部上半ハケメ　下半ハケメ→ナデ／7.5YR6／6橙～10YR6／4にぶ黄褐～黒斑	口縁・底部付近ハケメ　他ハケメ→ナデ　蜂の巣状に剥離煮沸痕か？／7.5YR6／4にぶ橙～2.5Y5／3黄褐～黒斑	密　まばらに礫	良好　二次あり？	
12－6	8号竪穴	古式土師器	甕	60	17／21／6.4	口縁ハケメ→横ナデ　以下ハケメ→工具ナデ／2.5YR4／6赤褐～10YR6／6明黄褐～10YR5／3にぶ黄褐～黒斑	口縁ハケメ→ナデ　以下ナデ　煮沸痕明瞭／5YR4／6赤褐～10YR5／4にぶ黄褐～黒斑	密　まれに3㎜の礫	良好　二次あり	若干歪む　12－1と雰囲気が似る
12－7	8号竪穴	古式土師器	甕	60	16.7?／22.6／5.4	上半ハケメ→ナデ　下半ハケメ→工具ナデ／5Y4／8赤褐～10YR5／4にぶ黄褐～黒斑	口縁付近・底部付近ハケメ　他ナデ・工具ナデ　煮沸痕明瞭／7.5YR6／6橙～10YR4／2灰黄褐～黒斑	密　最大3㎜のスコリア状粒が混じる	良好　二次あり	シャープで薄手
13－1	15号竪穴	古式土師器	甕	20	18.9?／－／－	口唇きつい横ナデ　他ハケメ／7.5YR4／4にぶ黄橙～7.5YR3／1黒褐	口縁ハケメ　以下ナデ／10YR6／4にぶ黄橙～10YR4／2灰黄褐	密	良好　二次あり	混入

図版番号	出土遺構	種　別	器　種	遺存%	寸法：口／高／底cm	外面の特徴／色調	内面の特徴／色調	胎　土	焼　成	備　考
13－2	15号竪穴	須恵器	甕	5	－／－／－	タタキ／2.5Y3／1黒	ナデ／2.5Y5／1黄灰	精緻	良好	
14－1	9号小竪穴	ロクロ土師器	高杯	70	18.1～18.7／9.6?／10?	ロクロナデ／7.5YR6／4にぶ橙～10YR7／3にぶ黄橙	ロクロナデ／7.5YR6／4にぶ褐～10YR7／4にぶ黄橙	密　まれに3㎜の礫	良好	近辺よりイノシシの臼歯上下出土
14－2	9号小竪穴	陶器	甕	5	－／－／－	タタキ／7.5Y5／1灰～N5／0灰	ナデ／N4／0灰	密　まばらに3㎜の礫	良好	
14－3	9号小竪穴	ロクロ土師器	杯	50	11.3?／3.9／5.6～6.0	ロクロナデ　底面糸切り→周縁部ヘラケズリ／5YR5／4にぶ赤褐～7.5YR6／6橙～黒斑	ロクロナデ／2.5YR4／8赤褐～10YR5／4にぶ黄褐～黒斑	密　まばらに1㎜の砂粒	良好　二次あり？	
14－4	9号小竪穴	ロクロ土師器	杯	100	－／－／7.4	ロクロナデ／7.5YR6／4にぶ橙	坏部ロクロナデ　底部糸切り／外面と同じ	精緻	良好	
14－5	9号小竪穴	ロクロ土師器	杯	30	11.4?／3.5?／4.4	体部上半ロクロナデ下半手持ちヘラケズリ　底面ヘラケズリ→ナデ／5YR5／6明赤褐～7.5YR3／1黒褐	ナデ／5YR4／6赤褐～7.5YR4／3褐	密	良好	
14－6	9号小竪穴	土師器	甕	25	20?／－／－	口縁横ナデ　以下ヘラケズリもしくは工具ナデ／7.5YR6／6橙～10YR6／4にぶ黄橙～黒斑（・煤）	口縁横ナデ　以下ナデ／2.5YR5／6明赤褐～10YR6／3にぶ黄橙～黒斑（・煤）	密	良好　破片化後の二次あり	
14－7	9号小竪穴	土師器	甕	30	19?／－／－	口縁横ナデ　以下ヘラケズリもしくは工具ナデ／7.5YR6／6橙～黒斑（・煤？）	口縁横ナデ　以下ナデ／7.5YR6／6橙～7.5YR5／4にぶ褐	密　まれに最大3㎜の礫	良好	
14－8	9号小竪穴	土師器	甕	25	12.5?／－／－	口縁横ナデ　以下ヘラケズリもしくは工具ナデ／5YR4／4にぶ赤褐～黒斑（・煤）	口縁横ナデ　以下ナデ／外面と同じ	密	良好　二次あり	
14－9	9号小竪穴	須恵器	壺	10	17.7?／－／－	横ナデ／5Y6／1灰	横ナデ／5Y6／1灰～光沢（自然釉）	精緻　まれに1㎜の砂粒	良好	
14－10	9号小竪穴	土師器	椀	50	－／－／6.6?	ヘラケズリ・ナデ／10YR5／4にぶ黄褐	ナデ／7.5YR6／6橙	密　まれに4㎜の礫	良好	
15－1	7Ｊ45グリッド	縄文石器	打製石鏃	80	長1.4幅1.4厚0.4	－	－	－	－	0.6ｇ　黒曜石
15－2	32号溝	陶器	椀	20	12?／－／－	釉／7.5Y8／1～7／1灰白	外面と同じ	密	やや不良	
15－3	7Ｊ59グリッド	縄目瓦	平瓦	5	厚さ2.2	布圧痕／10YR5／3にぶ黄褐	縄目圧痕／10YR6／4にぶ黄橙	密	良好　土師質	
16－1	11号方形周溝	古式土師器	壺	5	24?／－／－	拡張部下端に刻み縦ハケメ→横ナデ→ヘラミガキ／5YR5／4にぶ赤褐	横ハケメ→以下外面と同じ／5YR4／4にぶ赤褐～黒斑	密　まばらに2㎜の砂粒	良好	
16－2	11号方形周溝	古式土師器	甕	20	17.5?／－／－	ハケメ　口唇面あり／10YR3／1黒褐～10YR7／4にぶ黄橙	ハケメ→工具ナデくびれ若干緩い／10YR7／4にぶ黄橙	密　非在地的に見える	良好　二次あり	
16－3	11号方形周溝	古式土師器	甕	20	16.5?／－／－	ハケメ→横ナデ／5YR5／6明赤褐～5YR5／4にぶ赤褐	ハケメ→工具ナデ／10YR4／2灰黄褐～7.5YR6／6橙	密　まれに1.5㎜の砂粒	良好　二次あり	
16－4	11号方形周溝	土師器	小型鉢	20	7.8?／－／－	口縁横ナデ　以下ハケメ→ナデ／10YR2／1黒	口縁横ナデ　以下ナデ・指頭圧痕／10YR6／2灰黄褐～10YR2／1黒	密	良好　二次あり	
16－5	11号方形周溝	陶器	甕？	5	－／－／－	／N6／0灰	／10YR5／2灰黄褐	密	良好	
16－6	11号方形周溝	土製品	土玉・土錘	40	径4.0　孔径0.5	手捏／5YR4／4にぶ赤褐	－	密	良好	17.7ｇ
16－7	11号方形周溝	土製品	土玉・土錘	100	径3.7～3.9　孔径0.55	手捏／5YR4／8赤褐～黒斑	－	密	良好	56.0ｇ
16－8	11号方形周溝	土製品	土玉・土錘	100	径4.0　孔径0.6	手捏／7.5YR5／4にぶ褐～黒斑	－	密	良好	55.1ｇ
16－9	11号方形周溝	土製品	土玉・土錘	100	径3.9　孔径0.6	手捏／5YR4／6赤褐～黒斑	－	密	良好	45.7ｇ

図版番号	出土遺構	種　別	器　種	遺存%	寸法：口／高／底 cm	外面の特徴／色調	内面の特徴／色調	胎　土	焼　成	備　考
16－10	11号方形周溝	土製品	土玉・土錘	50	径3.8　孔径0.6?	手捏／5YR5／4にぶ赤褐～5YR2／1黒褐（黒斑）		密	良好	25.5 g
16－11	31号道	施釉陶器	捏ね鉢	5	－／－／－	ロクロ成形→釉／2.5Y6／1黄灰	ロクロ成形→釉／2.5Y7／1灰白	やや粗　0.5～2㎜の砂粒が普通に混じる	良好	渥美焼か
16－12	31号道	施釉陶器	椀	70	－／－／4.6	ロクロ成形→釉／5Y7／1灰白～明るい水色	ロクロ成形→釉／10Y7／1灰白（釉）	密	良好	
16－13	31号道	青磁	椀	40	－／－／6.0?	高台貼り付け　ロクロ成形→釉／5Y5／1灰～5Y5／3灰オリーブ（釉）	ロクロ成形→釉　四角い刻印（文字か）あり	精緻	良好	
16－14	31号道	石製品	砥石	100	長9.7幅4.5厚1.9	木口面以外使われる／7.5Y4／1灰	－	－	－	105.1 g
16－15	31号道	縄文石器	敲き石	80	長9.0幅5.6厚3.3	上下端に敲打痕／2.5Y6／4にぶ黄若干赤変している	－	－	－	225.8 g 焼割礫
17－12	7 J84グリッド	陶器	甕	5	－／－／－	釉／5YR3／3暗赤褐（釉）	／10YR7／4にぶ黄橙～10YR3／1黒褐	密	良好	破断面が若干磨られている
17－13	2号溝	土師質土器	甕？	5	－／－／－	ロクロ成形／10YR5／3にぶ黄褐～10YR6／4にぶ黄橙	ロクロ成形／10YR6／4にぶ黄橙	密	良好	
17－14	2号溝	陶器	甕？	10	－／－／10?	ロクロ成形／2.5Y5／2暗灰黄	ロクロ成形／2.5Y5／3暗褐～暗いウグイス色	やや粗　まばらに最大3㎜の礫	良好	
17－15	2号溝	陶器	甕	5	45?／－／－	ロクロ成形　釉／5Y3／1オリーブ黒	ロクロ成形／5Y4／1灰	密	良好	
17－16	2号溝	縄文石器	打製石鏃	100	長2.8幅1.5厚0.6	－	－	－	－	1.9 g 黒曜石
17－17	2号溝	縄文石器	石皿	10	厚1.6～3.9	外周に直交するくぼみあり　両面とも平滑／5Y5／2灰オリーブ	－	－	－	293.1 g 安山岩

表3　16号貝ブロック組成

メッシュ	貝種別	個数	重量 g
1 ㎜	イボキサゴ	13	1
4 ㎜	イボキサゴ	240	84
	アカニシ	1	－
	アラムシロ	1	－
	ウミニナ属	1	－
	アサリ（L）	1	－
	アサリ（R）	1	－
	ハマグリ（R）	1	－
	カウント対象外	－	8
10㎜	イボキサゴ	928	957
	アカニシ	2	7
	シオフキ（L）	5	14
	シオフキ（R）	3	6
	カガミガイ（L）	1	2
	アサリ（L）	8	16
	ハマグリ（L）	14	82
	ハマグリ（R）	19	92
	カウント対象外	－	47

貝種別	個数	重量 g	割合（重）
イボキサゴ	1181	1042	79.2
アカニシ	3	7	0.5
アラムシロ	1	0	0.0
ウミニナ属	1	0	0.0
シオフキ（L）	5	14	1.1
シオフキ（R）	3	6	0.5
カガミガイ（L）	1	2	0.2
アサリ（L）	9	16	1.2
アサリ（R）	1	0	0.0
ハマグリ（L）	14	82	6.2
ハマグリ（R）	20	92	7.0
カウント対象外	0	55	4.2
総　計	1239	1316	100.0

表4　2号出土鉄滓

No.	出土遺構名	注　記	種　別	長径cm	短径cm	厚さcm	重量 g	磁着度	メタル度
1	002号	002－7	椀形鍛冶滓含鉄	10.5	9	3.5	440	6	L（●）
2	002号	002一括	椀形鍛冶滓含鉄	6	6	3.5	190	6	M（◎）
3	002号	002一括	椀形鍛冶滓含鉄鋼	6.5	4	2.1	80	5	△
4	002号	002－3	椀形鍛冶滓含鉄	5.5	5.5	5.5	335	3	
5	002号	002一括	椀形鍛冶滓含鉄	8	6	4	310	3	
6	002号	002－2	椀形鍛冶滓含鉄	6.5	6	3.6	170	2	
7	002号	002一括	椀形鍛冶滓含鉄	7	5	3.3	165	4	
8	002号	002－8	椀形鍛冶滓含鉄	8	7	3	150	2	
9	002号	002－5	椀形鍛冶滓含鉄	5.5	4.5	1.8	65	2	
10	002号	002－13	椀形鍛冶滓含鉄鋼	4.5	3	1.8	35	3	△
11	002号	002一括		4.5	3.5	2.7	55	4	

写 真 図 版

図版 1

昭和36年の地形
約5000分の 1

16号

19号土器出土状況

5 号全景

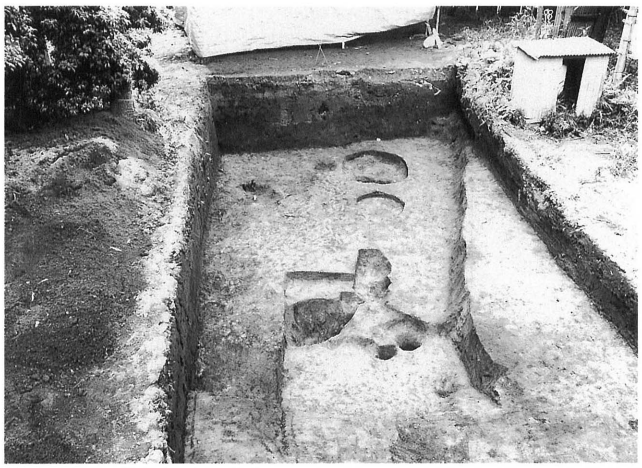
7 号遺物出土状況

40号全景

35号遺物出土状況

35号北西部分拡大

35号南中央部分拡大



1 号全景

30号全景

33号全景

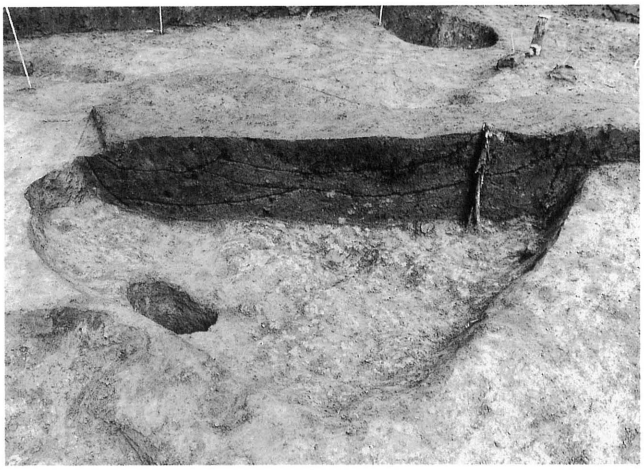
4 号全景

34号全景

8 号遺物出土状況

10・12号

15号全景



9 号堆積状況

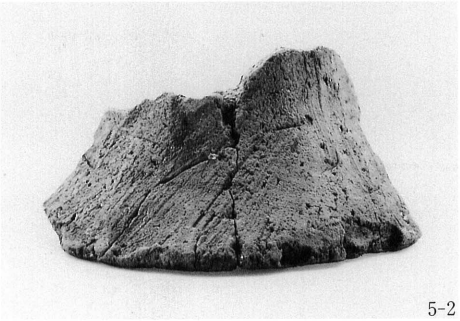
調査区東端

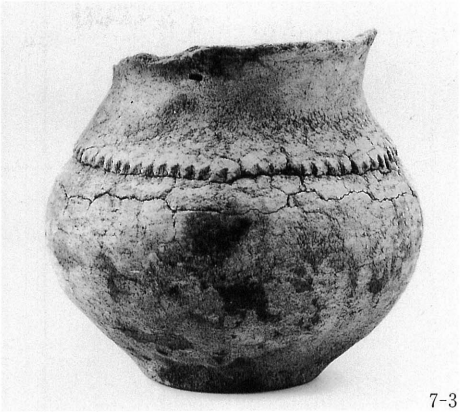
9 号焼土中遺物出土状況

31号

31号堆積状況

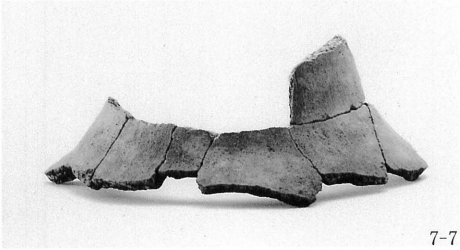
2 号

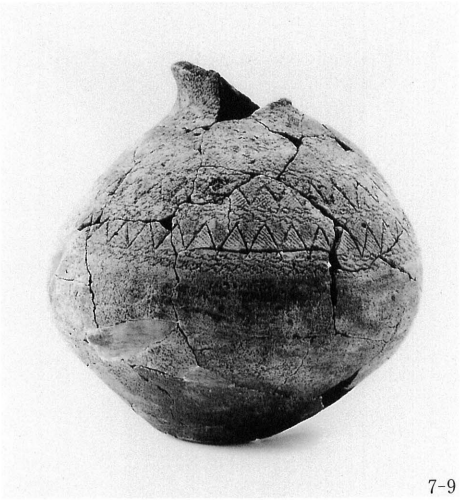

5-2

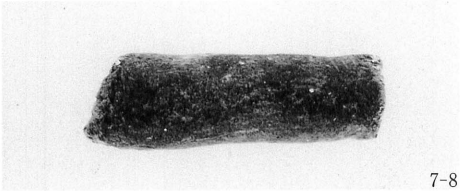

7-3

7-4

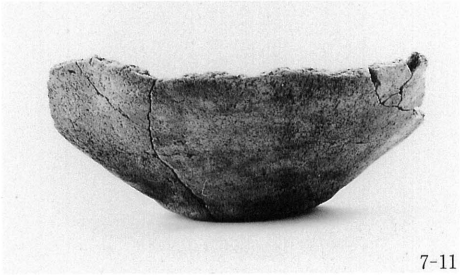
6-5


7-7

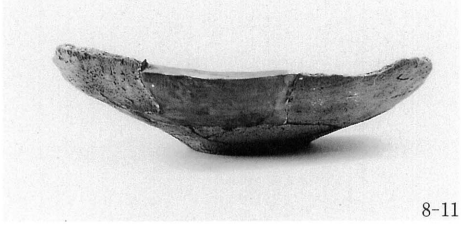

7-9


7-8

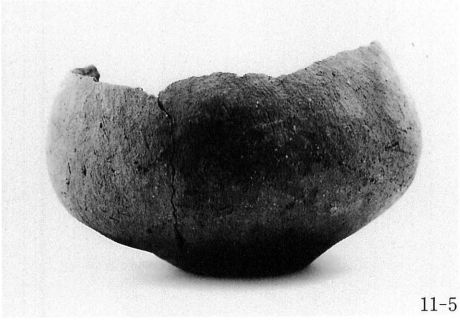
8-3

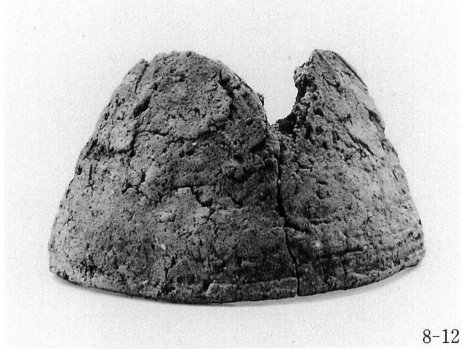

7-11

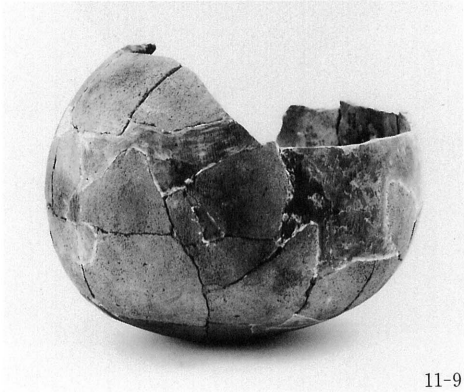
7-10


8-11

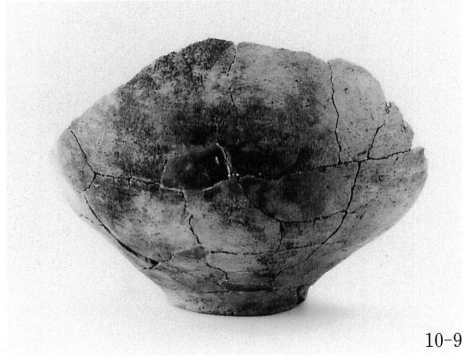
11-2


11-5


8-12


11-9

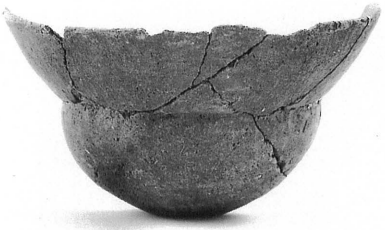
10-1


10-9

10-5

10-11

9-9



10-7

10-4

9-13

9-11

9-8

12-1

9-12

12-5

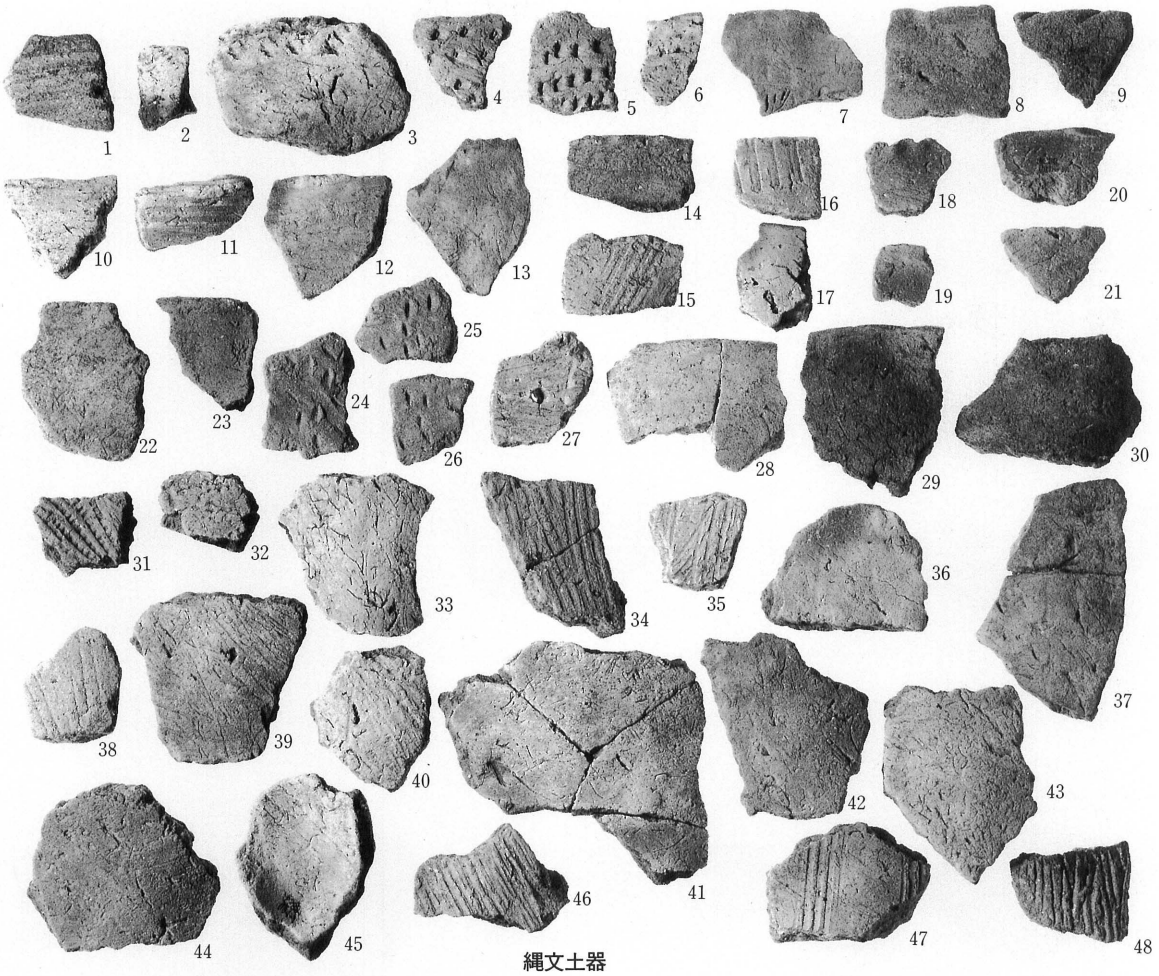
12-2

12-4

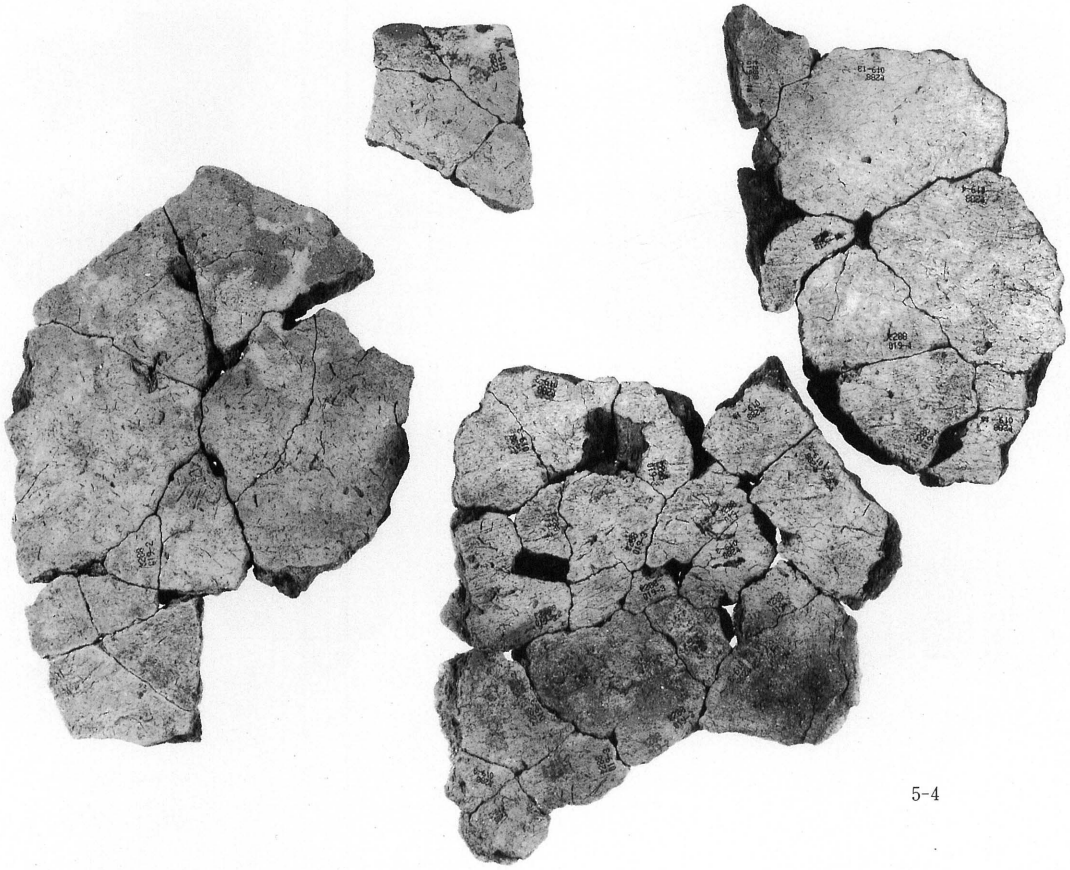
12-6

12-7

14-1

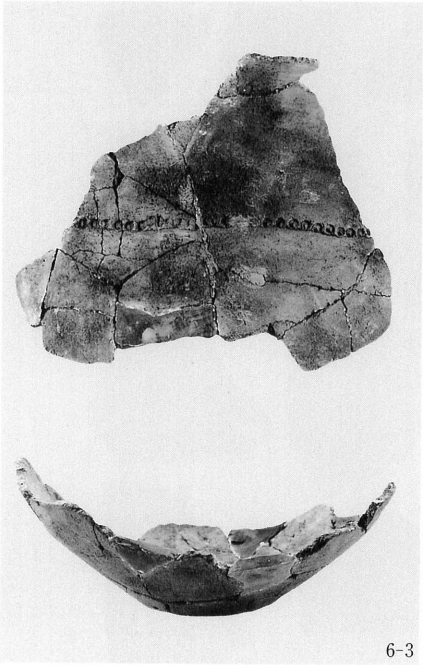


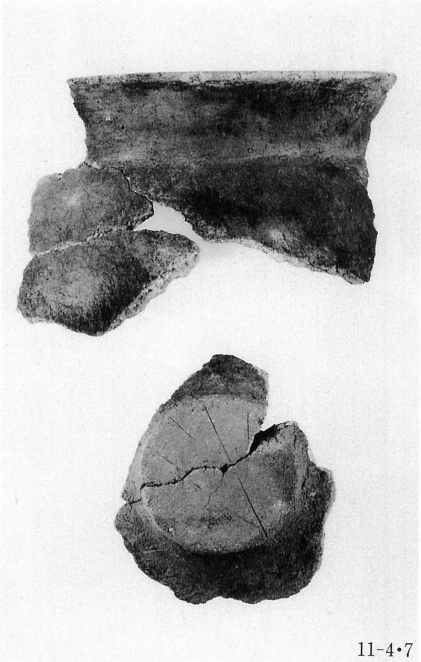
縄文土器

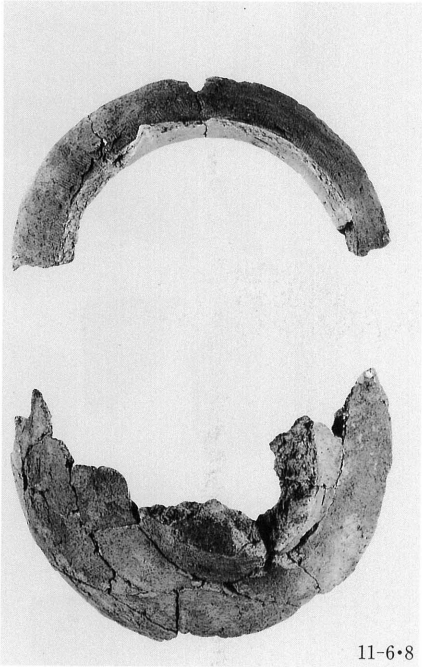


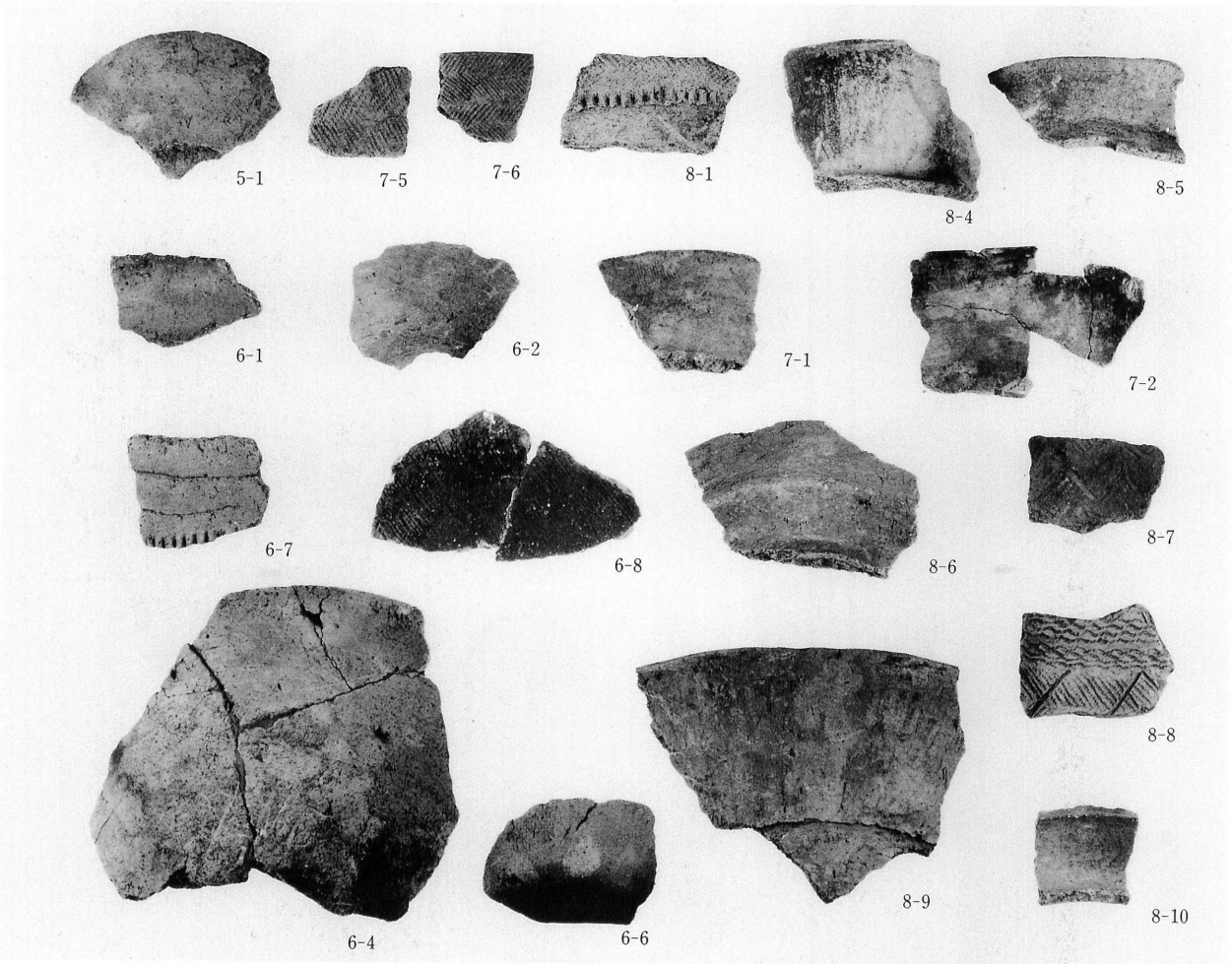
5-4

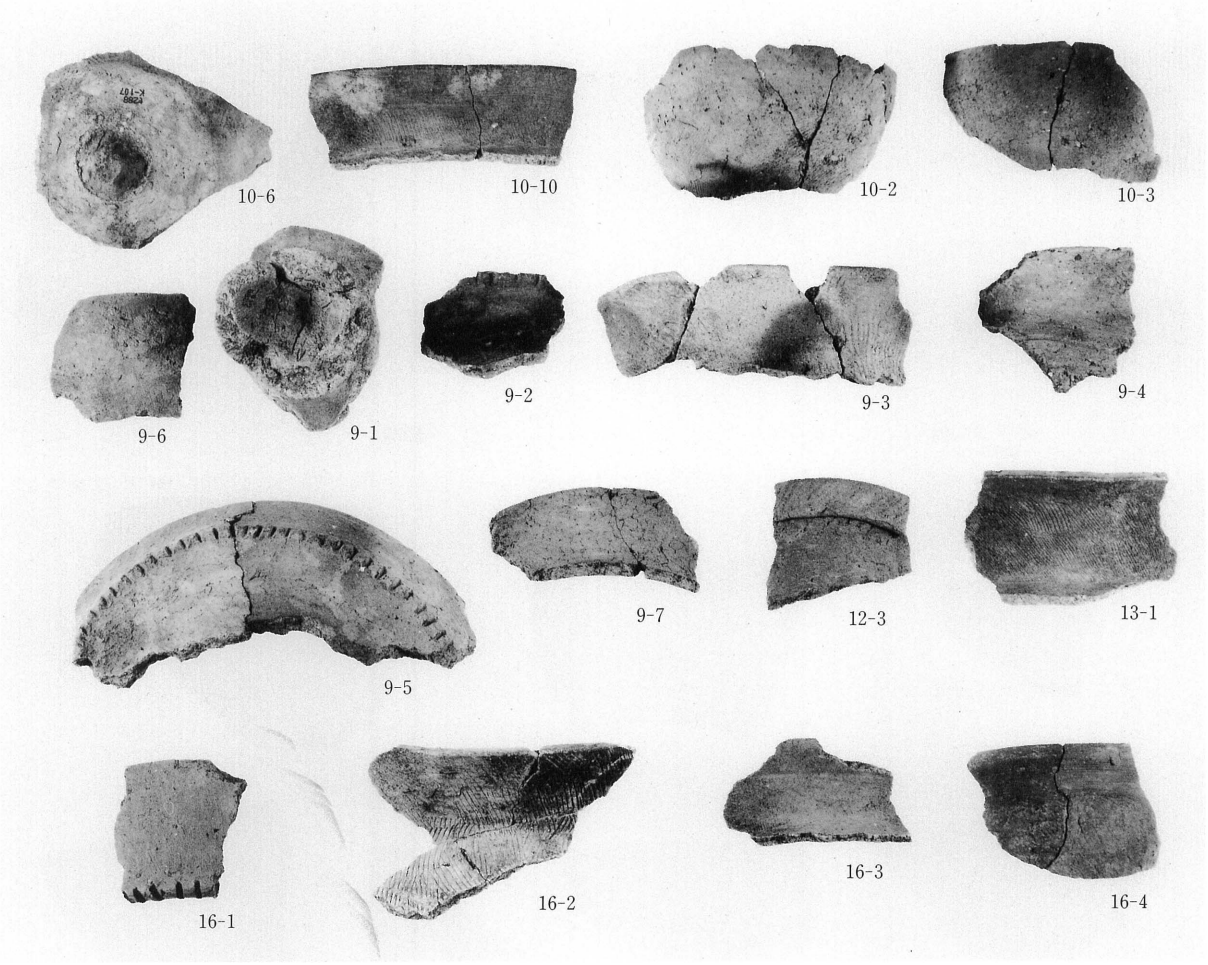
19号出土土器

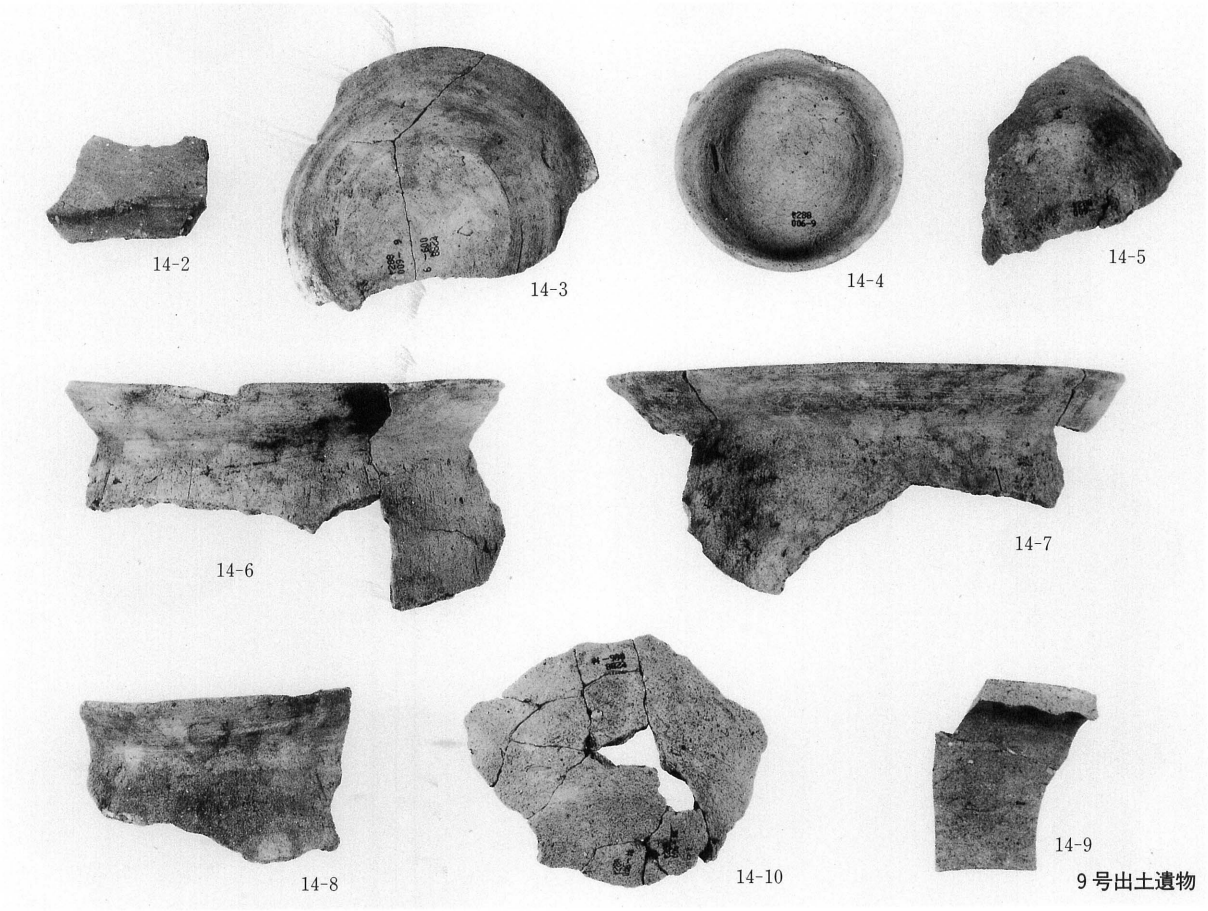

6-3


11-4・7

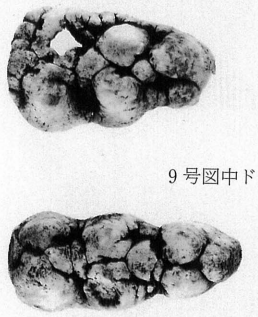

11-6・8




10-6
10-10
10-2
10-3
9-6
9-1
9-2
9-3
9-4
9-5
9-7
12-3
13-1
16-1
16-2
16-3
16-4

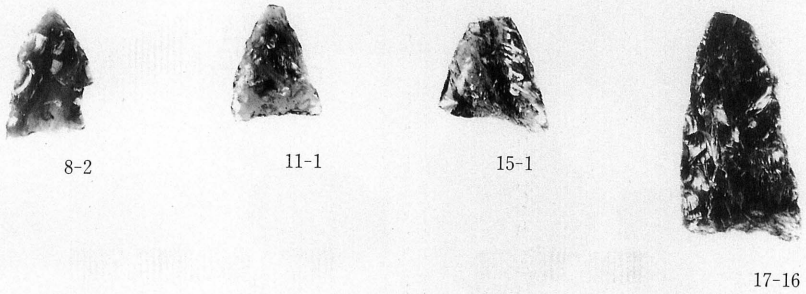

14-2
14-3
14-4
14-5
14-6
14-7
14-8
14-10
14-9

9号出土遺物



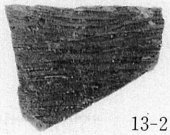
9号図中ドット

イノシシ歯

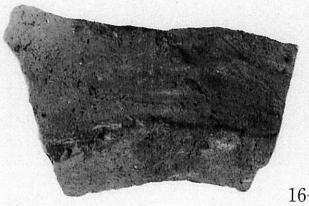


8-2　11-1　15-1　17-16

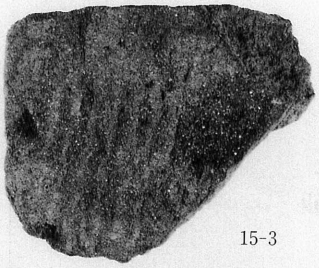
石鏃



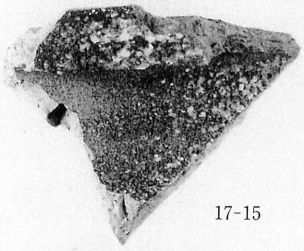
13-2



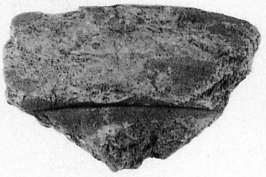
16-5



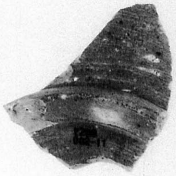
15-3



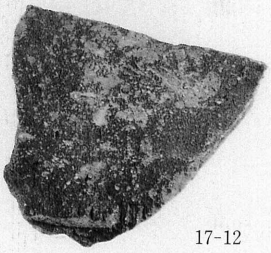
17-15



17-13

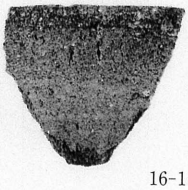


17-14

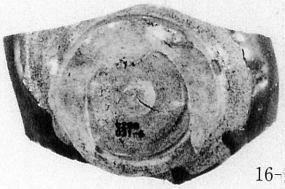


17-12

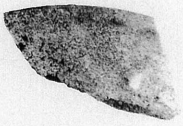
16-13



16-11



16-12



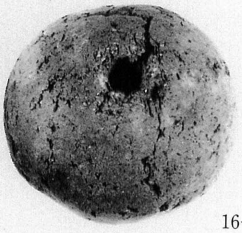
15-2

9-10

鉄鏃

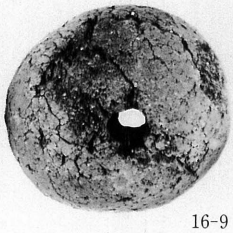
11-3

16-6

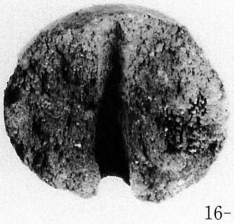


16-7

16-8

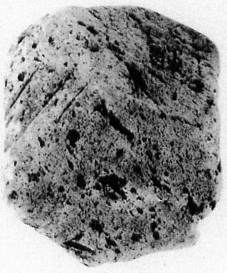


16-9



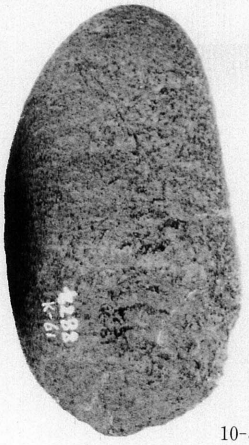
16-10

土玉・土錘

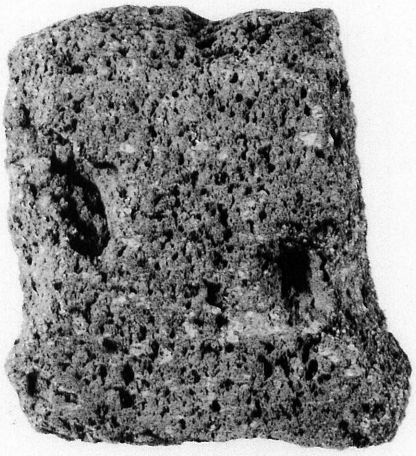


5-3

6-9



10-8

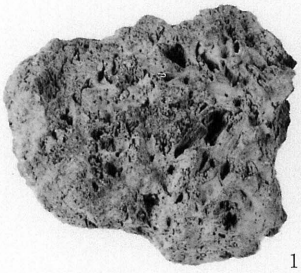


17-17

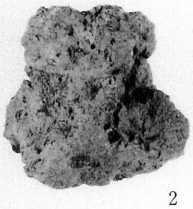
16-15

16-14

石製品



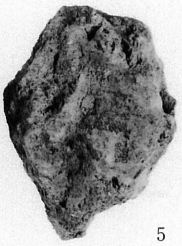
1



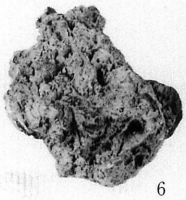
2

3

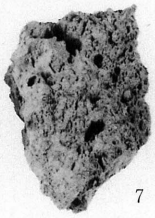
4



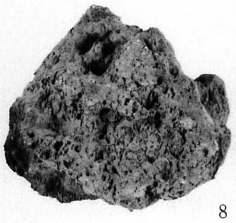
5



6

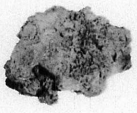


7



8

9



10

11

鉄滓

報告書抄録

ふりがな	いちはらしかたまたぎいせきに
書名	市原市片又木遺跡Ⅱ
副書名	
差次	
シリーズ名	財団法人　市原市文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第70集
編集者名	小橋健司
編集機関	財団法人　市原市文化財センター
所在地	〒290-0011　千葉県市原市能満1489番地　TEL 0436（41）7300
発行年月日	2000年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
片又木遺跡（かたまたぎ）	千葉県市原市不入斗字北宮ノ台186番地先他（ちばけんいちはらしいりやずあざきたみやのだい）	12219	255	35° 27′ 14″	140° 3′ 56″	確認調査 19990316 ～0318 本調査 19990405 ～0517	確認調査 679.32の 10%67.9 本調査 630	第一種電気通信無線基地局建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
片又木遺跡	包蔵地 集落跡	縄文時代早期 弥生時代後期 ～ 古墳時代前期 平安時代 中近世	縄文早期炉穴　2基 弥生後期竪穴　11軒 古墳前期竪穴　6軒 古代方形周溝　1基 平安竪穴　2軒	縄文土器 弥生土器、古式土師器、鉄鏃 ロクロ土師器 陶器	縄文早期田戸上層式から子母口式を中心とする土器が出土した。弥生後期～古墳前期にかけての竪穴建物群が高い密度で検出された。

財団法人　市原市文化財センター調査報告書　第70集

市原市片又木遺跡Ⅱ

平成12年3月22日　印刷
平成12年3月29日　発行

編集　財団法人　市原市文化財センター

発行　エヌ・ティ・ティ移動通信網株式会社

財団法人　市原市文化財センター
市原市能満1,489番地
TEL　0436－41－7300

印刷　株式会社　正文社
千葉市中央区都町2－5－5